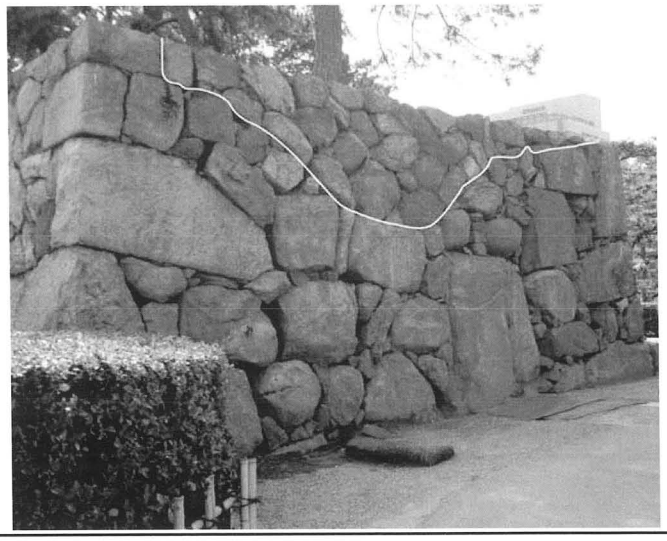
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の黒櫓台の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約3.7m、全長は天端で約7.7mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石と割石を用いた乱積であるが、部分的に割石による谷積が見られる。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形状のものと丸みのあるものが混在し、規模も比較的大きなものと比較的小さなものが混在する。標準的な規模の石材は少ない。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・焼損が見られる。 ・石材のワレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在する開口部であるが、『高松城下図屏風』によると、№2012石垣と№2031石垣がそのまま北へ延びるように描かれており、松平初期の改修により新たに築造ないしは積み直しがあったと考えられる。 ・石の積み方が乱雑であり、谷積も見られることから、明治以降の積み直しが考えられる。

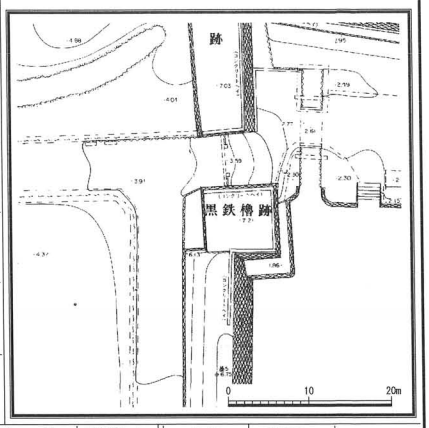
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
両隅角近傍天端から石垣中段部に至る皿形目地	皿形の中	花崗岩	割石丸み	皿形中側が小ぶり	割石谷積	上方石垣積み直し
	皿形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2029	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法		谷積	
方　位	西				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	黒櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

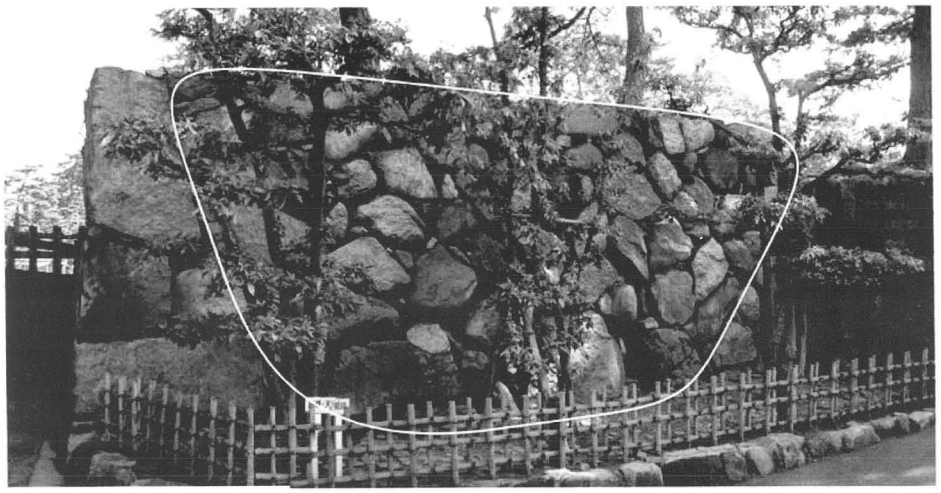


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.36	7.31	3.05	3.85	3.03	81	80	81	82	85

築造時期	松平初期	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



谷積

※全体に谷積となり、後世に改修されたものか。

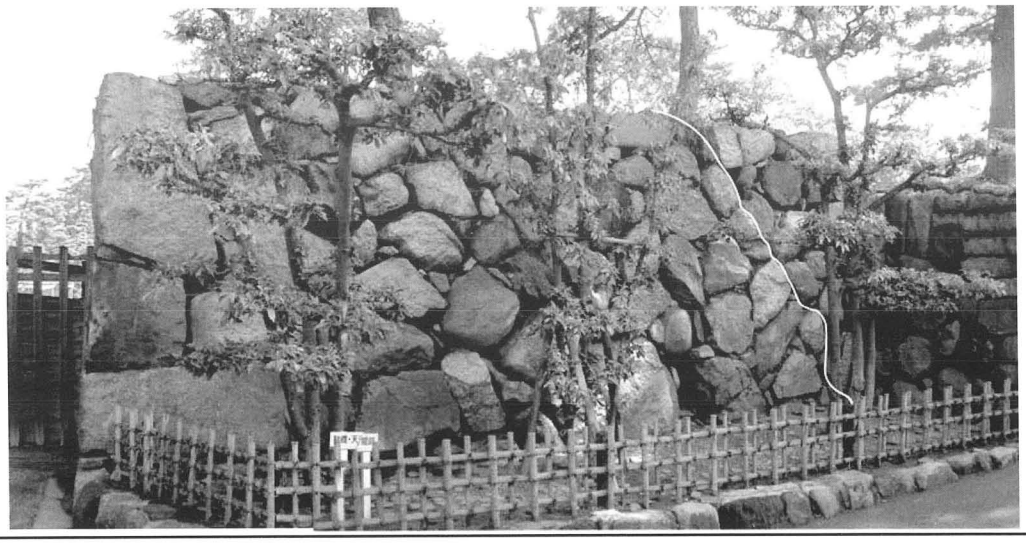
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の黒櫓台の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約3.9m、全長は天端で約8.4mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた谷積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形のものと丸みのあるものが混在し、規模は標準的な石材が多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によると、№2031石垣がそのまま北へ延びるように描かれており、生駒期には存在しない石垣であり、松平初期の改修により築造された石垣と考えられる。 ・全面に谷積が見られ、明治以降に全体の積み直しが考えられる。

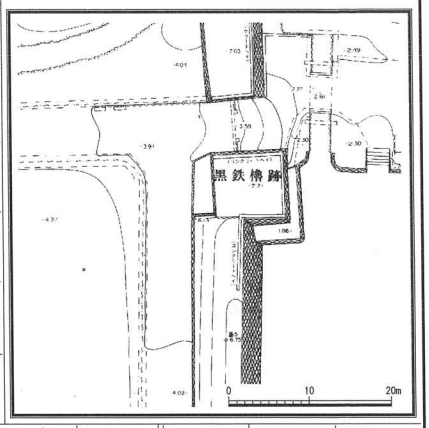
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形角張る	ほぼ同規模	野面石乱積	入隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形角張る		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2030	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	切石、野面	石垣位置
石垣部位	その他(後世のもの)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

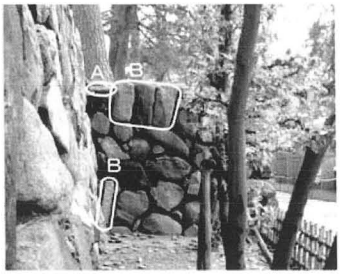


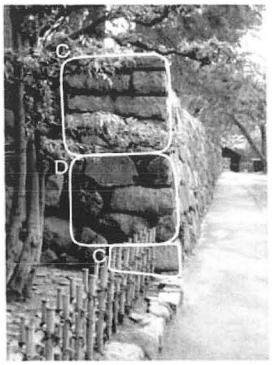
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	n1										a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.83	2.7	2.01	2.2	2.28	75	78	79	81	81

築造時期	明治以降	改修	基底部
修　理		文献資料	『高松御城全図』
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状





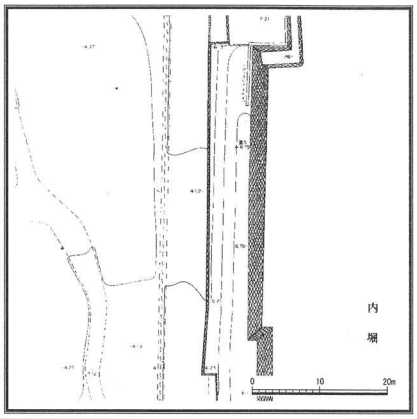
A．ヌケ
B．石材の縦使い
C．切石
D．割石
※No.2029の石垣が奥に入る。これより新しい時代のものか。

備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の黒櫓台に取り付く北面内石垣である。 ・高さは中央部で約2.2m、全長は天端で約2.8mである。 ・勾配は79度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石や割石を用いた乱積である。右隅角の下半は割石、上半は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形のものと丸みのあるものが混在し、規模は標準的な石材が多い。 ・右隅角は算木積であるが、その完成度は下半が低く、上半は高い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・天端の欠損が見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松御城全図』によると南向きに上がる雁木が描かれており、本来は雁木であったと考えられる。 ・明治以降に雁木石材を再利用し構築した石垣と考えられ、特に右隅角の切石は雁木の踏み面と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

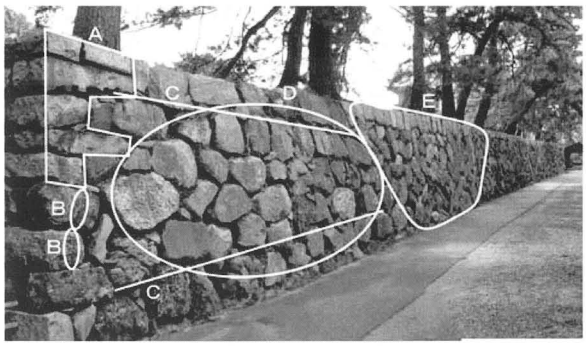
石垣番号	2031	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		割石、野面	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法		乱積、谷積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	野面、割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		安山岩、花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s12	s2	s2				s2			a2	b1	B

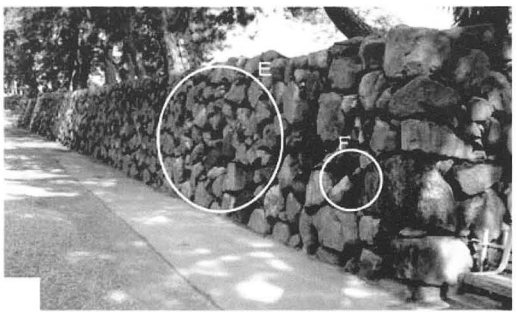
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	48.6	48.95	2.37	2.18	2.25	81	83	80	87	84

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．石材が階段の石のように扁平
B．ワレ
C．横目地
D．ハラミ
E．谷積（安山岩使用）
F．ズリ出し、間詰石ヌケ



備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

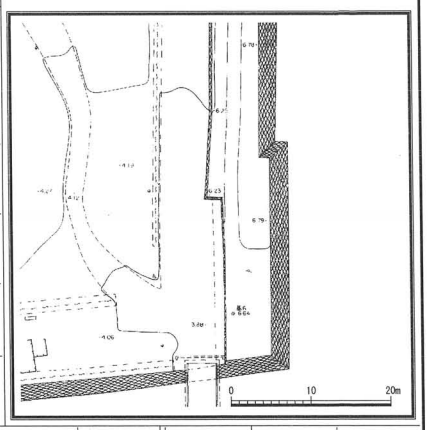
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸東部の内石垣で、黒櫓台から南へ延びる。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約2.2m、全長は天端で約48.6mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は安山岩、花崗岩の割石と野面石を用いた乱積であるが、左隅角近傍で谷積が見られる。左隅角は切石、右隅角は野面石と割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形のものと丸みのあるものが混在し、規模は標準的な石材が多い。 ・中央部の縦目地より左側は天端を扁平な切石で揃えている。 ・左隅角は完成度の高い算木積で、右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・築石部右半中段にハラミが見られる。 ・天端や中段に石材のズレが見られる。 ・石材のワレが散見される。
石垣の変遷	・生駒期から所在する石垣と考えられる。 ・改修痕跡も多く見られ、天端石等もきれいに揃えられており、明治以降の改変が著しい。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角近傍天端から下部	左側	花崗岩	割石丸み	ほぼ同規模	割石乱積	左側部分の積み直し
まで至る左下がりの目地	右側	花崗岩	割石丸み		割石乱積	
右隅角近傍天端から下部	左側	花崗岩	割石丸み	ほぼ同規模	割石乱積	右側部分の積み直し
まで至る左下がりの目地	右側	花崗岩	割石丸み		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2032	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左	野面、割石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	-				石材		安山岩、花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

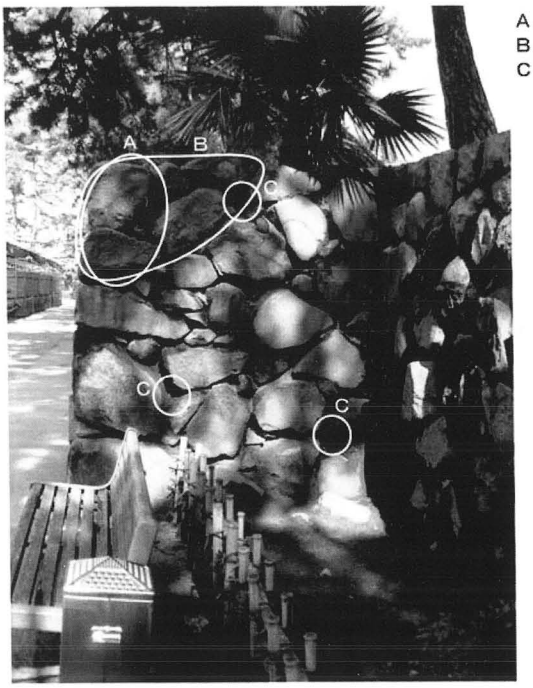


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		1.78	1.99	2.25	-	2.27	84	85	88	84	82

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．算木積でない
B．上面は積み替えか？
C．間詰石ヌケ

備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

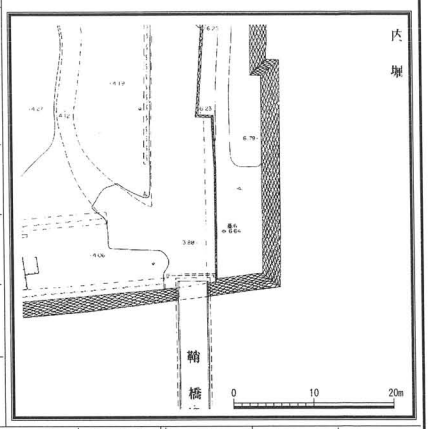
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸東部の南面内石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは約2.3m、全長は天端で約1.8mである。 ・勾配は88度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は安山岩、花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は野面石と割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状で、規模はやや小ぶりの石材が多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在する石垣と考えられる。 ・上部は積み直しが考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角中段から右隅角上部に至る目地	上方	花崗岩	丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	左隅角部の積み直し
	下方	花崗岩	丸み		野面石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2033	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		割石、野面、切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法		乱積、谷積	
方　位	西				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右	割石、野面	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		安山岩、花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

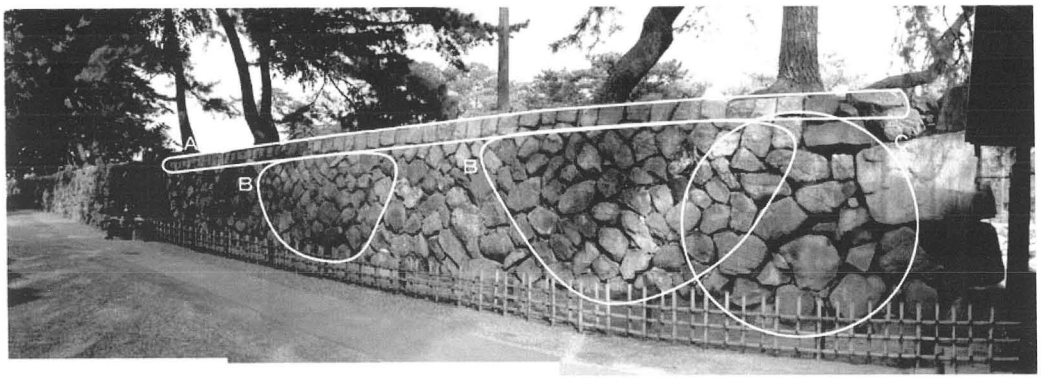


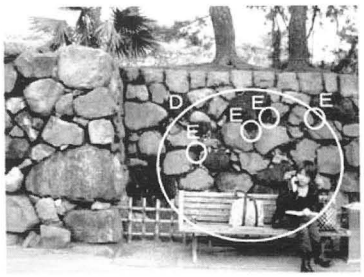
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2t4					s2			a2	b1	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		20.1	23.2	2.28	2.48	2.87	82	87	85	86	83

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状





A．天端石揃う
B．谷積
C．ハラミ大、マツの根によるもの
D．ややハラミ
E．間詰石のヌケ

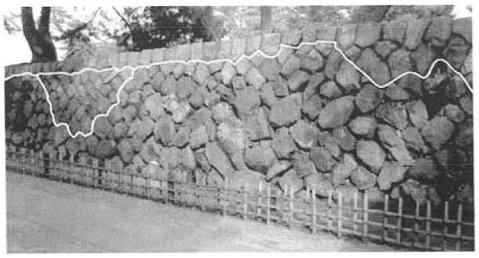
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

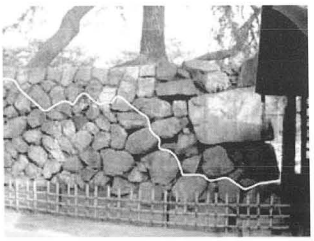
石垣項目別カルテ

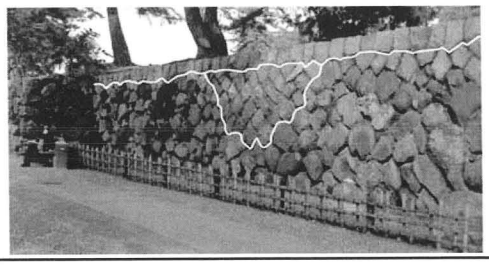
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸東部の西面内石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約2.5m、全長は天端で約20.1mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は本来は安山岩、花崗岩の野面石や割石を用いた乱積であったと考えられるが、割石や切石による谷積が主体を占める。天端に笠石を積み、天端面を揃えている。右隅角の下半は野面石、上半は割石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形のものと丸みのあるものが混在し、規模は標準的な石材が多い。 ・右隅角は上半は完成度の低い算木積であるが、下半は算木積を意識しているが、算木積とはなっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・右隅角部にやや大きなハラミが見られる。櫓台上には松の木が大きく育っており、その影響も大きいと考えられる。また、中央部にも薄いハラミが見られる。 ・間詰め石のヌケも散見される。
石垣の変遷	・生駒期から所在する石垣と考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると、2箇所の谷積部分付近にはそれぞれ東向きに上る雁木が描かれており、後世の改修を受けたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
笠石下の目地	上方	花崗岩	切石方形	ほぼ同規模	切石布積	笠石の積み上げ
	下方	花崗岩	割石方形		割石乱積	
左中間上中部の谷形目地	谷形の中	花崗岩	切石方形	ほぼ同規模	切石谷積	谷状部分の積み直し
	谷形の外	花崗岩	割石方形		割石乱積	
右隅角下部から石垣上部へ至る左上がり目地	左側	花崗岩	方形角張る	ほぼ同規模・隅角部は大石	野面石谷積	右隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形角張る		野面石乱積	



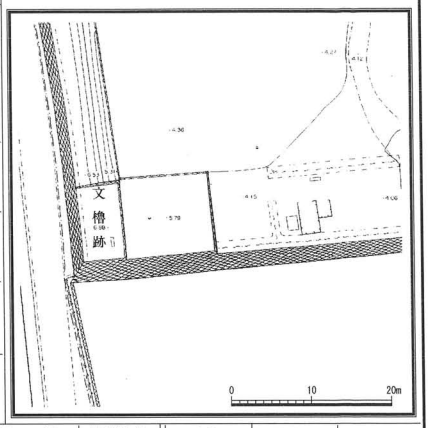




史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2034	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法		乱積
方　位	東				角石（算木）	左	割石
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材		安山岩、花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

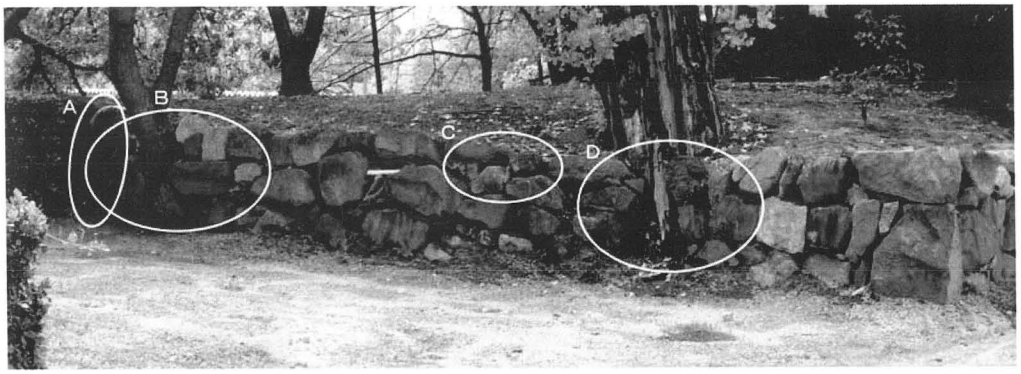


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			t1					s1			有	a2	b3	C

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		9.63	10.18	1.62	0.95	1.02	75	81	73	89	85

築造時期	明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．パイプ
B．センダンの木によりズレだし
C．後転
D．イチョウの木によって崩落

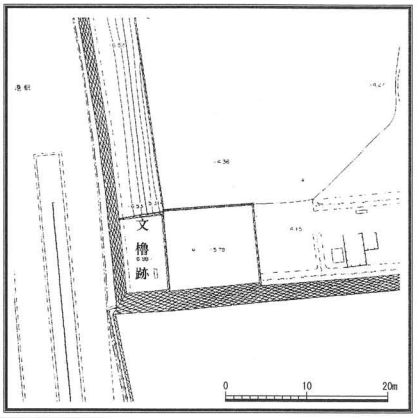
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸南部の文櫓の東に続く、一段低い櫓台状の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.0m、全長は天端で約9.6mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は安山岩、花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石垣面が右隅角近傍で曲面となって内に入る。イチョウの大木にすり合わせて積んでいる。 ・石材は丸みのある石材が多く、規模は標準的なものが多い。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。右隅角は2石を積んで隅角としているが、下の石材は縦使いである。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・イチョウの木の取付部分で崩落が見られる。 ・左端のセンダンの木近くでズレが見られる。 ・左隅角近傍に排水パイプが設置されている。
石垣の変遷	・絵図には描かれていない石垣であり、明治以降のものと考えられる。 ・イチョウの木の取付部分は、一度崩落し、再度イチョウの木にすり合わせるように積んだと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2035	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	割石、野面	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	布積	
方　位	北				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	柱状の石材			刻　印		無	



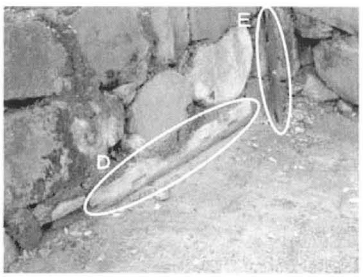
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s1						s12		有	a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	11.38	11.38	1.02	1.03	0.87	85	85	80	80	76

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．間詰石ヌケ
B．横目地
C．ズレだし
D．石の塀の柱（近代のもの）
E．パイプ



備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

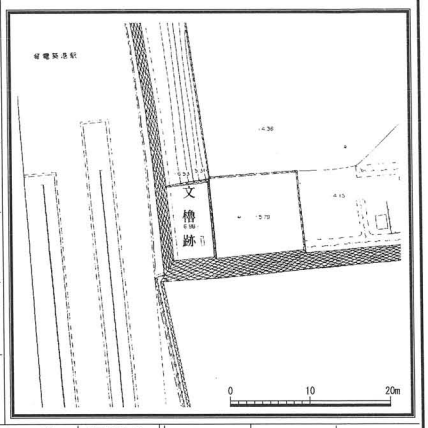
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸南部の文櫓の東に続く、一段低い櫓台状の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.0m、全長は天端で約11.4mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石と野面石を用いた布積であるが、やや崩れて乱積に近い。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石垣面はかなり凸凹がある。 ・石材は角張った石材が多く、規模はやや大ぶりの石材が多い。 ・左隅角は2石を積んで隅角としているが、下の石材は縦使いであり、算木積になっていない。 ・根石に花崗岩の切石の石柱が転用されている。 ・刻印は見られない。
破損状況	・天端石のズレが見られる。 ・間詰石のヌケが見られる。 ・右隅角にパイプが沿わされている。
石垣の変遷	・絵図には描かれていない石垣であり、根石に近代の塀の基礎と考えられる石柱が使用されていることから、明治以降に築造された石垣と考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣下部の横目地	上方	花崗岩	方形割石	下方は小石材	割石乱積	上方石垣の積み直し
	下方	花崗岩	方形割石		割石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2036	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	布積	
方　位	東				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	文櫓				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

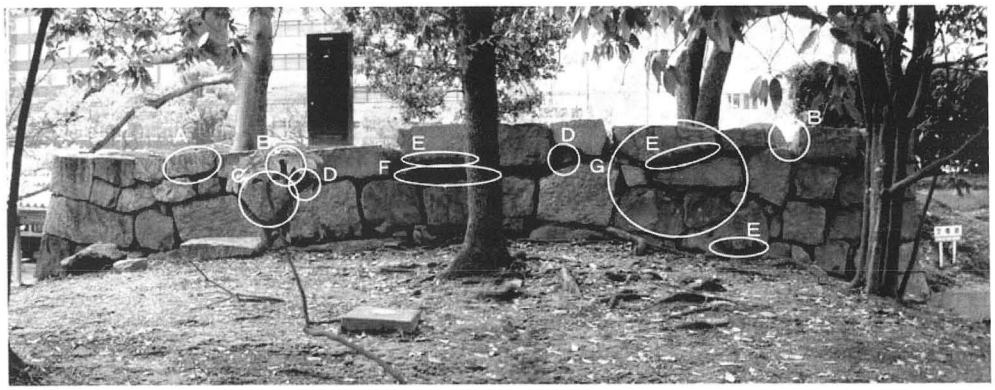


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s1	n1		s1							a2	b3	C

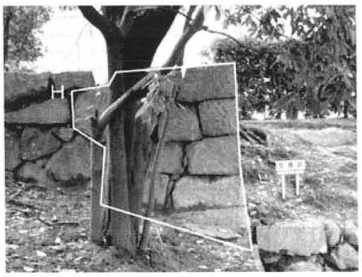
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		9.5	9.86	1.48	1.23	1.83	80	85	85	86	84

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A. 天端石不陸
B. 天端石のヌケ
C. ズレ
D. 間詰石のヌケ
E. 矢穴
F. 扁平石使用
G. ヒビ、ワレ多く入る（焼けか）
H. 方形切石



備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

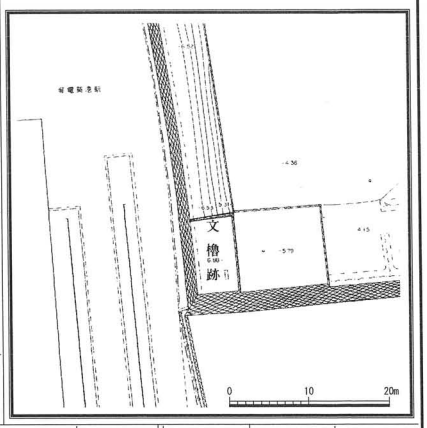
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸南部の文櫓の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.2mであるが、下半はNo.2034、2035石垣により埋められている可能性があり、本来はもっと高い石垣であった可能性がある。全長は天端で約9.5mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は角張った石材や丸みのあるもの、多角形のものが混在する。規模も標準的なもの以外にやや小ぶりのものも多く見られる。 ・左隅角は完成度が高い算木積であるが、右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端の不陸、欠損、間詰石のヌケ、石材のひび割れなどの変形が全体的に見られ、安定性に欠ける。
石垣の変遷	・明治以降に積み直されている可能性が高いと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
両隅角部を結ぶ横目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	布積
	下方	花崗岩	方形割石		割石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2037	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法		布積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	文櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

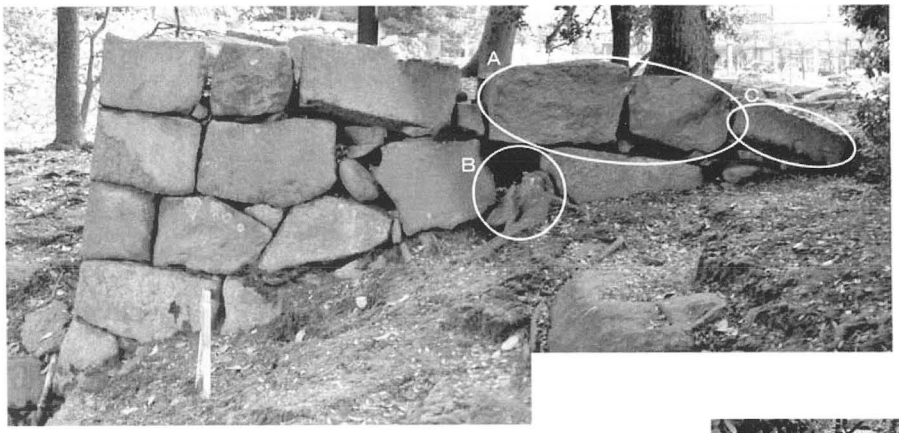


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			t1						t1			a2	b3	C

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		5.32	5.32	1.83	-	0.36	84	86	81	-	-

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．ズレ
B．間詰石のヌケ、樹根伸びる
C．角石のレベルに合わせるためか

備　考	短い石垣のため中央高省略、残存石垣一石のみで計測不可	調査年月日	平成16年12月17日

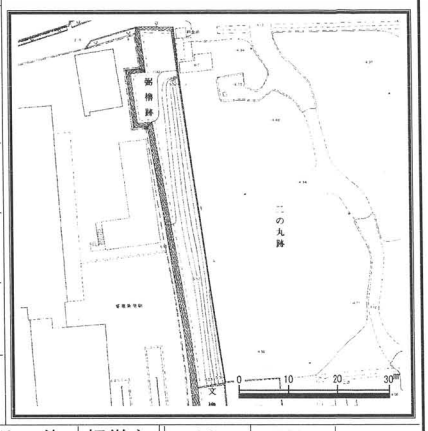
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸南部の文櫓の北面内石垣である。 ・高さは左端で約1.8m、全長は天端で約5.3mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角はすり付けである。 ・天端のレベルが一定でなく、右隅角に向けて中央部付近から斜めに下がり、石列状態になっている。 ・石材は角張ったものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。右隅角はNo.2016石垣に1石積んだものである。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石材のズレ、間詰石のヌケが見られる。樹根の影響を受けていることが予想される。
石垣の変遷	・生駒期から所在した石垣で、何度か改修されたと考えられる。 ・天端は明治以降に積み直されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右隅角に至る横目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	根石上方の積み直し
	下方	花崗岩	方形割石		割石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

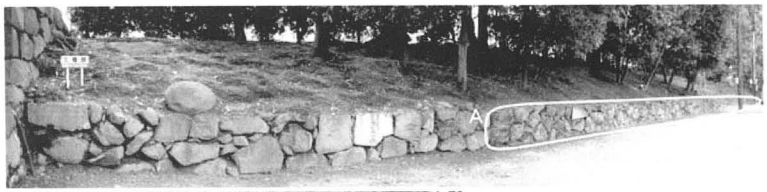
石垣番号	2038	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	乱積、布積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	加工石				刻　印	無	

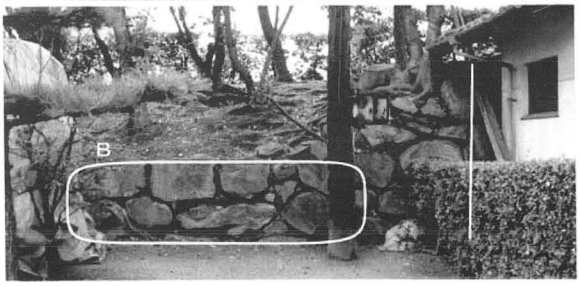
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	70.74	70	0.81	0.56	3.04	76	85	80/87	80	75

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査	『高松市内遺跡発掘調査概報　平成15年度』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．安山岩が多く新しく積み直したと思われる
B．比較的大きな方形の割石
C．目地
※建物裏面は野面の大石多い

備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

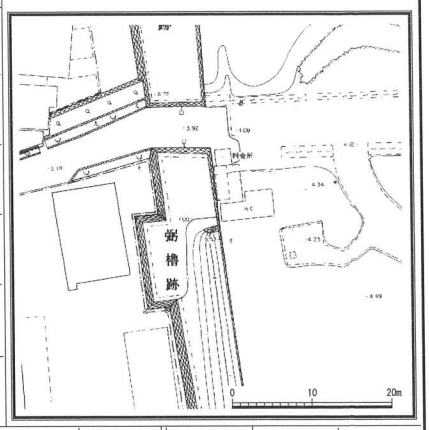
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の文櫓台から北へ延びる内石垣である。 ・高さは中央部で約60cm、全長は天端で約70.7mである。 ・勾配は80～87度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積であるが、一部割石を用いた布積が見られる。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形のものが多く、規模は大ぶりのものが多い。 ・右隅角は完成度の低い算木積である。 ・弼櫓台東面に加工された石材が転用されている。 ・刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在した石垣と考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると弼櫓台東面には北へ上る雁木、弼櫓台と文櫓台の間には2箇所に西へ上る雁木が描かれており、明治以降の改変が考えられる。また、一連の石垣としては描かれておらず、後世の積み直しにより、連続した石垣となったと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
弼櫓台東面に見られる縦目地	左側	花崗岩	方形割石	やや大ぶり	割石布積	雁木部分の積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み	やや小ぶり	野面乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2039	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	雁木				石積工法		
方　位	南				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

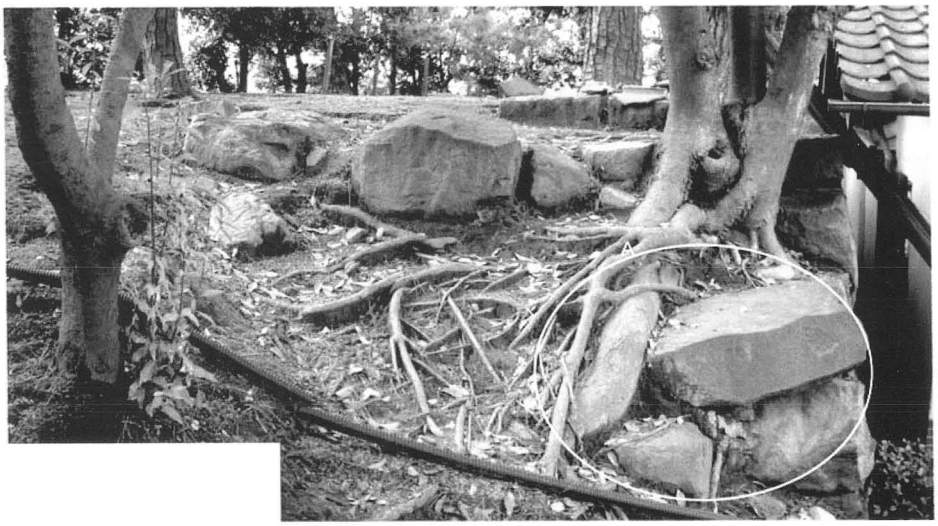


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.36	－	0.09	0.43	0.61	－	－	－	－	－

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



A．後世のもの

※多聞櫓の南面石垣

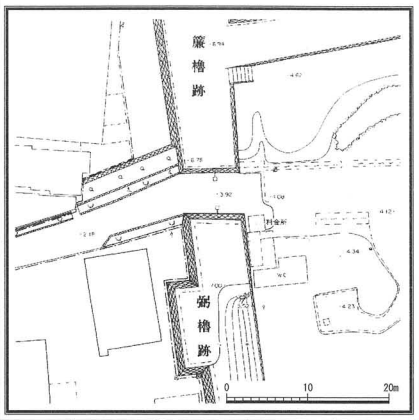
備　考	列石のため基底部長省略、残存石垣一石のみで計測不可	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の弼櫓へ上る雁木の一部と考えられる。 ・高さは中央部で約0.4mであるが、大半が埋没していると考えられ、本来はもっと高い雁木である。全長は天端で約3.3mである。
積み方石材等	・列石数石のため工法の詳細は不明である。右隅角は出隅角、左側は埋没のため地盤すり付けに見える。 ・石材は方形、規模は標準的な石材である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・一部しか露出しておらず、詳細は不明である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると北へ上る雁木が描かれており、雁木の最上段部分と考えられる。 ・№2038石垣を連続する一連の石垣とした際に埋没したと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2040	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面、割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		谷積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	門(刎橋口)				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

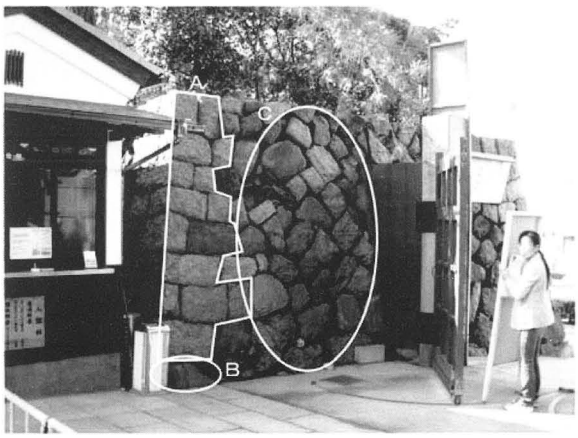


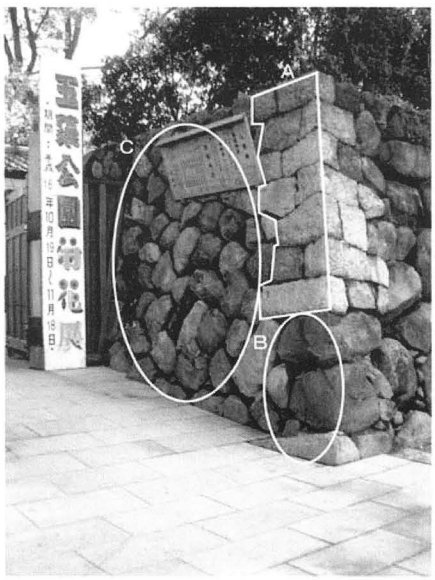
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.25	7.4	3.03	3.05	3.46	75	79	77	80	73

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．基底部以外開口部設置に伴い算木積とする
B．野面割石
C．谷積

※後世の改変による開口部

備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

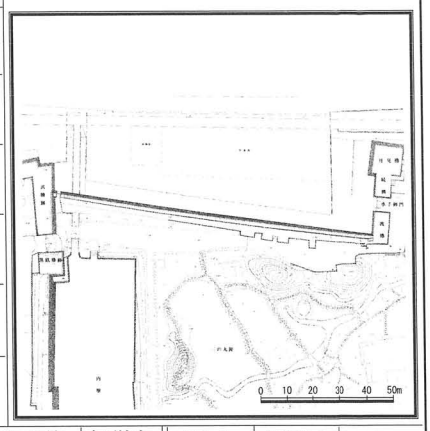
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の開口部の北面石垣で、現在城郭への西の玄関口の石垣である。 ・高さは中央部で約3.1m、全長は天端で約6.3mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石と割石を用いた谷積である。右隅角は中段より上方は切石を用いて積み上げられており、下半は野面石である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角の取れた丸みのある形状のものが多く、規模は小ぶりのものが多い。 ・両隅角とも完成度はあまり高くないが算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等によると、松平初期から新郭造築期にかけての記述に、新たに開口した門とされている。 ・現在の石垣は明治以降に開口部を拡張したものと考えられる。 ・右隅角部最下段に、築造時のものと考えられる石材が露出している。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角中段から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石谷積	異なる石材・石積工法
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	
左隅角上部から根石に至る右下がりの目地	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	異なる石材・石積工法
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石谷積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3001	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法	乱積、谷積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	塀				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

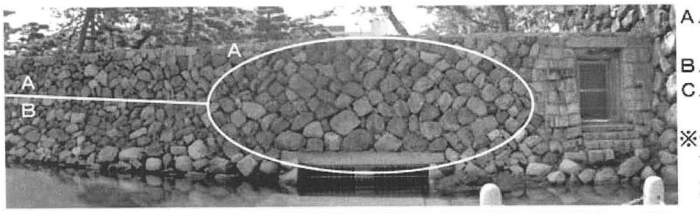


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s3	s3					w3			a2	b2	B

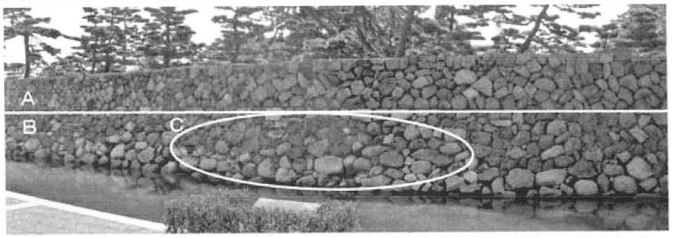
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		120.5	119.96	2.54	4.29	2.82	79	83	71	74	76

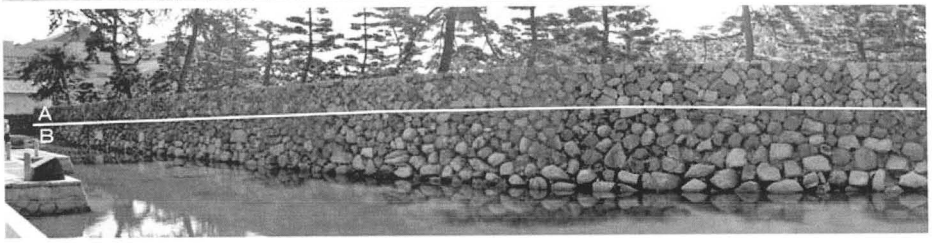
築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．上部：割石と切石の安山岩で積み直し
　　（谷積）
B．下部：野面
C．小ハラミ
　足元前面にコンクリート土留あり
※全体的にゆるいハラミあり
　下部間詰石のヌケ多い
　大石使用





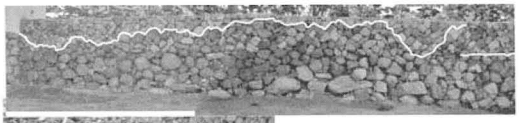
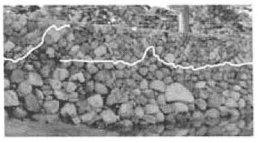
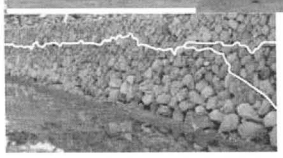
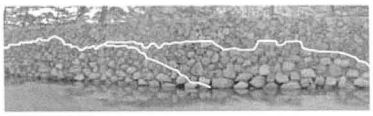
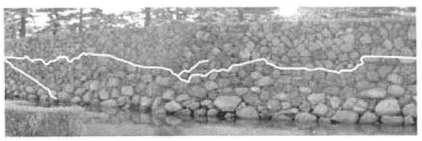
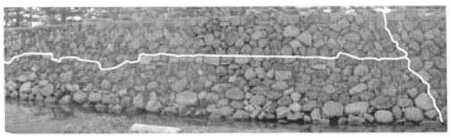
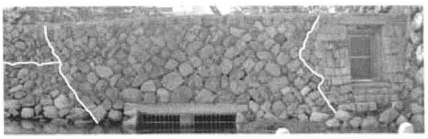
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の北側旧海面外壁の北面石垣である。 ・高さは中央部で4.3m、全長は天端で約120.5mである。 ・勾配は71度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積であるが、上部約1.3mについては、割石や切石を用いた谷積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は丸みのあるものが多く、規模はやや大ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣下段に薄いハラミが連続的に見られる。またズレも所々見られる。 ・間詰石のヌケも散見される。 ・最下段前面部に伸縮材を当ててコンクリートが打たれ、地盤が作られている。
石垣の変遷	・生駒期に築造されたものと考えられる。 ・天端から約1.3m下で横目地が通っており、上部は明治以降に積み足された石垣と考えられる。

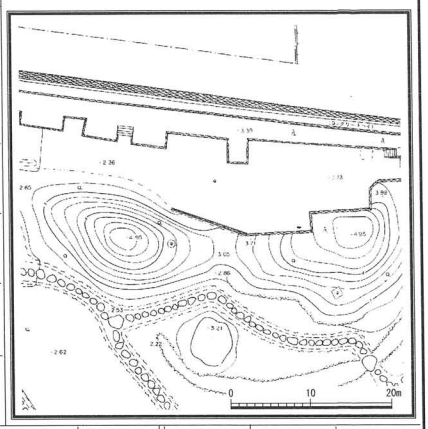
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部上部から右隅角部近くまでの横目地	上方	花崗岩	方形角・丸	ほぼ同規模	割石谷積	上方の積み足し
	下方	花崗岩	方形角・丸		野面石乱積	
右隅角近傍の右下がりの目地	左側	花崗岩	方形角・丸	ほぼ同規模	野面石乱積	右側の積み直し
	右側	花崗岩	方形角・丸		割石谷積	
右隅角近傍開口部左側の縦目地	左側	花崗岩	方形角・丸	ほぼ同規模	割石谷積	右側の積み直し
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3002	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	その他（庭）				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右		
	右隅角	すりつけ			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

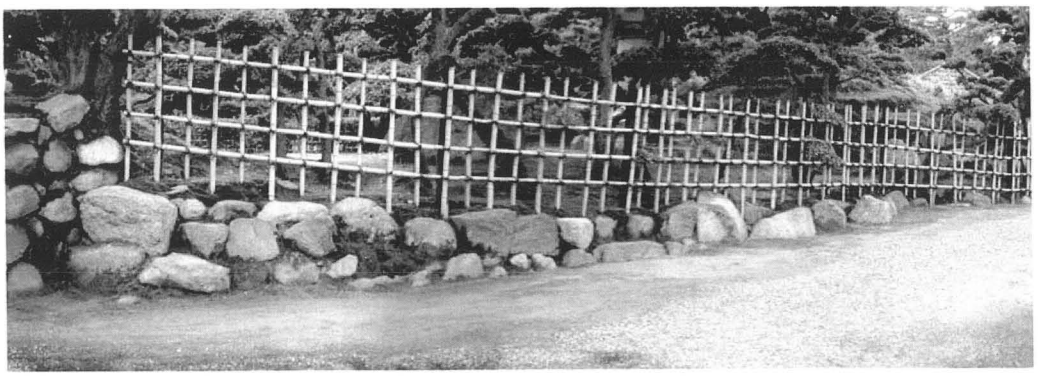


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.04	8.18	0.7	0.51	0.34	－	－	－	－	－

築造時期	新郭造築期	改修	基底部
修　理		文献資料	
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



※自然石風の石。三の丸の庭園背後の土留か。

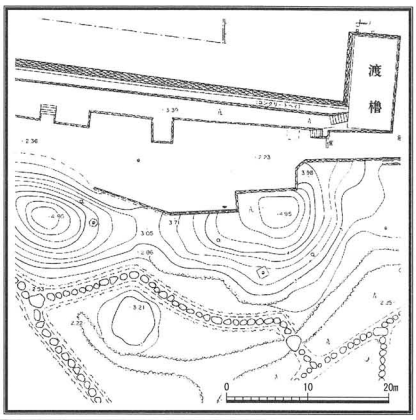
備　考	残存石垣一石のみで計測不可	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の北面石垣で、通路と庭園を画している。石列もしくは造園の縁石状である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約0.5m、全長は天端で約8.0mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は入隅、右隅角は1石が地盤にすり付く。 ・石材は不定形で、規模は大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものの可能性が高い。 ・その後の改変は行われていないと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3003	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（庭）				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩（一部）	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	n1										a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		8.82	8.21	2.05	1.28	1.27	89	85	86	84	89

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．欠損
※石材の形状不揃い

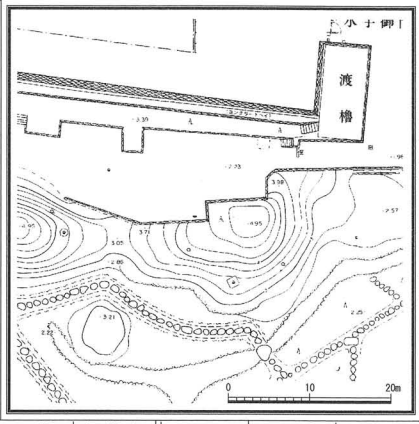
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の北面石垣で、通路と庭園を画している。庭園部の土留石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で1.3m、全長は天端で約8.8mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。天端に笠石を積む。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形で、角の取れた丸みのあるものが多いが角張った不定形のものも見られ、石材形状が一定でない。規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・天端石の欠損が一部見られるが、大きな変形もなく安定している。
石垣の変遷	・松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものの可能性が高い。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3004	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	その他（庭）				石積工法	乱積	
方　位	西				角石（算木） 左	割石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

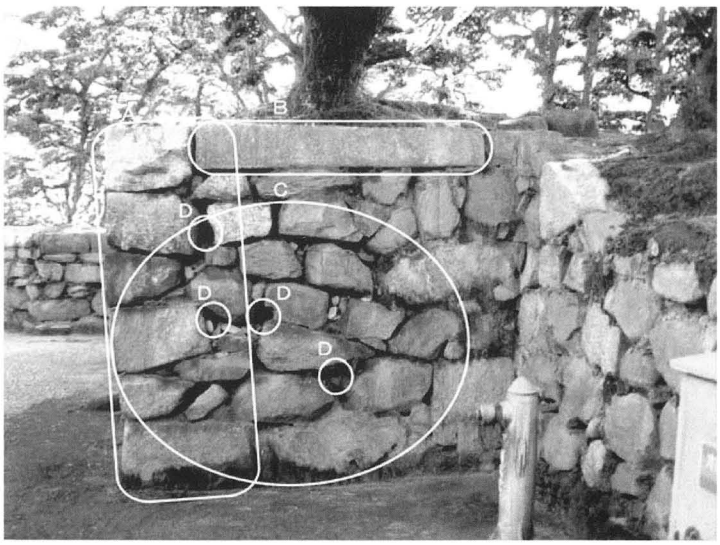


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2	r4		a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		2.42	2.34	2.05	2.07	2.06	89	85	86	84	89

築造時期	新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．焼けている？
B．積み直し
C．安山岩多い（黒っぽい石材）
D．間詰石ヌケ

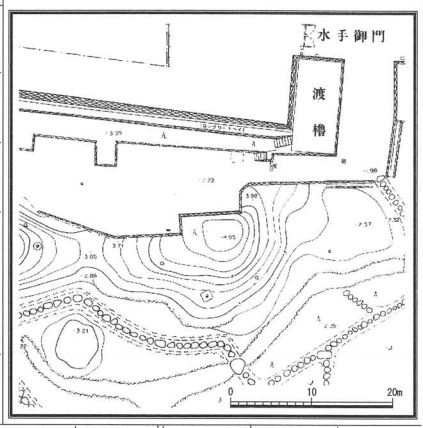
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の西面石垣で、通路と庭園を画している庭園部の土留石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で2.1m、全長は天端で約2.4mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。天端に笠石を積む。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で角張ったものが多く、規模はやや小ぶりなものが多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるものの変形もなく安定している。 ・隅角部の石材は焼損を受けている。
石垣の変遷	・松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものの可能性が高い。 ・『旧高松御城全図』によると湾曲した石垣として描かれており、明治以降に積み直されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3005	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（庭）				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	切石、割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

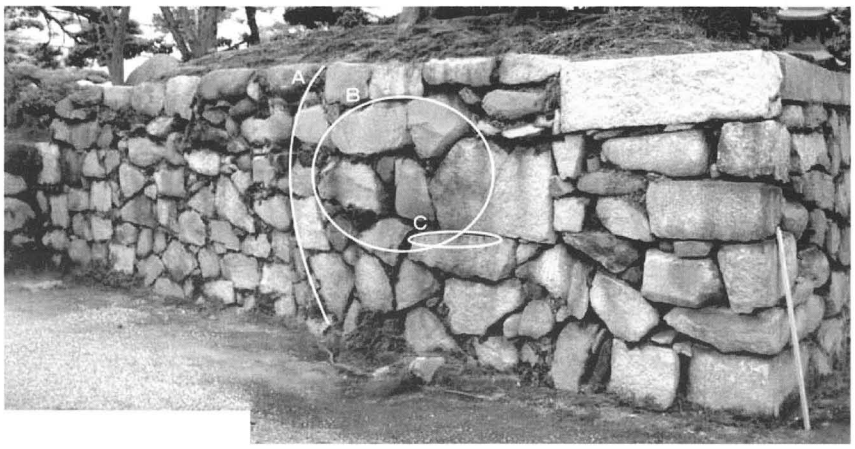


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2								a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	7.83	7.56	2.46	1.98	2.04	90	89	90	89	89

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．目地
　左の石材はだいたい同じくらいの大きさだが、
　右は石材に大小がある
B．うすいハラミ
C．矢穴

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

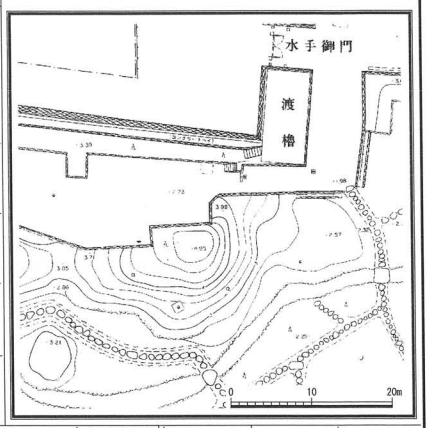
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の北面石垣で、通路と庭園を画している。庭園部の築山の土留石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で2.0m、全長は天端で約7.8mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。天端に笠石を積む。右隅角は切石と割石によって積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で角張ったものが多く、規模は標準的なものが多いが、やや大ぶりなものも見られる。 ・右隅角は、完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・薄いハラミがあるものの安定している。
石垣の変遷	・松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものと考えられる。 ・上部及び中央から右寄りの部分は積み直しが考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部から縦目地に至る横目地	上方	花崗岩	方形	上方の石材が小ぶり	割石乱積	積み直し
	下方	花崗岩	方形		割石乱積	
中央部下部から上部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形	左側が小ぶり	割石乱積	積み直し
	右側	花崗岩	方形		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3006	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石、切石	石垣位置
石垣部位	その他（庭）				石積工法	乱積	
方　位	西				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩（一部）	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.28	2.31	1.52	1.5	1.44	89	90	90	88	90

築造時期	新郭造築期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

A．本来の石垣の石材か？

※長い切石を横手に用いる

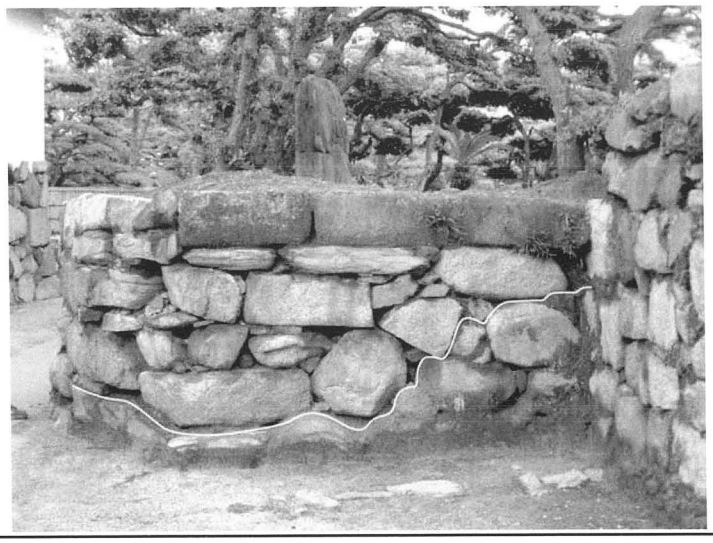
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

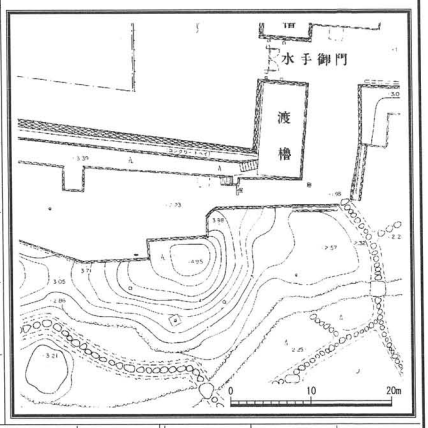
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の西面石垣で、通路と庭園を画している。庭園部の築山の土留石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約1.5m、全長は天端で約2.3mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石と割石を用いた乱積である。天端に直方体の切石を用いた笠石を積む。左隅角は曲面を帯びる。右隅角は入隅である。 ・石材は方形でやや扁平しているものと角張ったもの、丸みのあるものが混在する。規模は大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものの可能性が高い。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部中段から根石に至る目地	上方	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	割石布積	積み直し
	下方	花崗岩	方形		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3007	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	その他（庭）				石積工法		布積	
方　位	北西				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		1.74	1.74	1.45	1.5	1.52	89	89	-1	89	89

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

目地

備　考	平面R	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

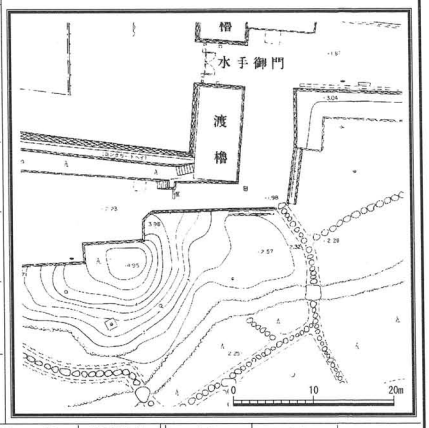
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の北西面石垣で、通路と庭園を画している。庭園部の築山の土留石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約1.5m、全長は天端で約1.7mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた布積である。両隅角とも緩やかな曲線を描くように積んでいる。 ・石材は方形でやや扁平なものが多く、規模は大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものの可能性が高い。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
両隅角部を結ぶ根石上の目地	上方	花崗岩	方形不定形	ほぼ同規模	割石布積	積み直しか築造時のもの
	下方	花崗岩	方形		割石乱積	
左隅角部近傍上部の縦目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	割石乱積	積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	方形角張る		割石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3008	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、切石	石垣位置
石垣部位	その他（庭）				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

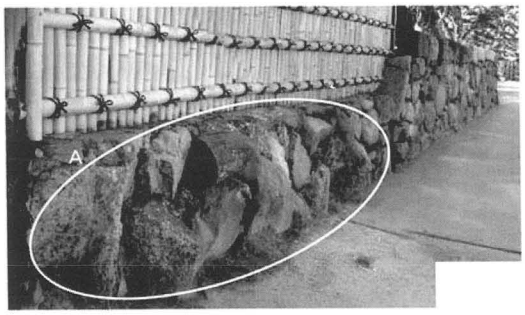


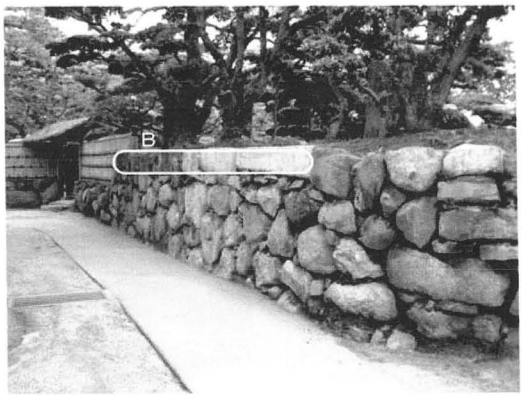
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		6.26/9.16	15.17	0.95	1.61/1.71	1.45	90	90/89	87	86	89

築造時期	新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．面が揃わず庭園の石材か？
B．天端のみ長手の切石

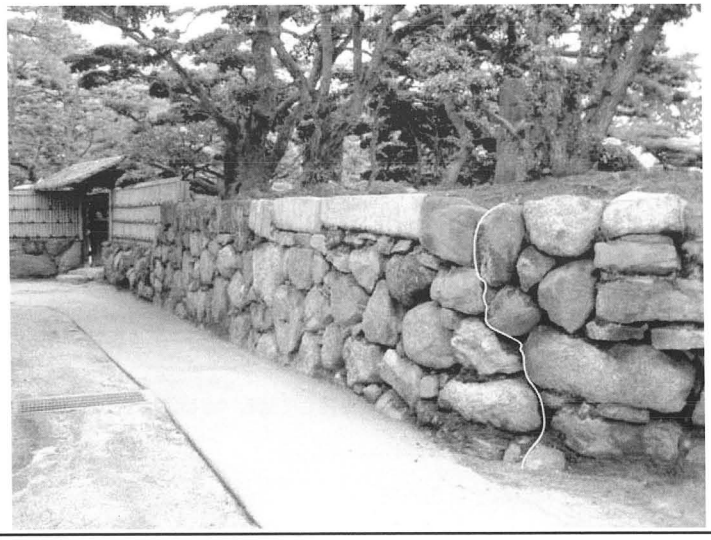
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の北面石垣で、通路と庭園を画している。庭園部の築山の土留石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約1.7m、全長は天端で約15.4mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。天端に横方向に長い切石を積んでいる。左隅角付近は石垣面の出入りが大きく不揃いである。 ・石材は方形で丸みのあるものが多く、規模は大ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものの可能性が高い。 ・『旧高松御城全図』によるとやや南へ湾曲する石垣と入隅で接する東方向へ直線的に延びる石垣が描かれており、明治以降に直線的に積み直されたと考えられる。

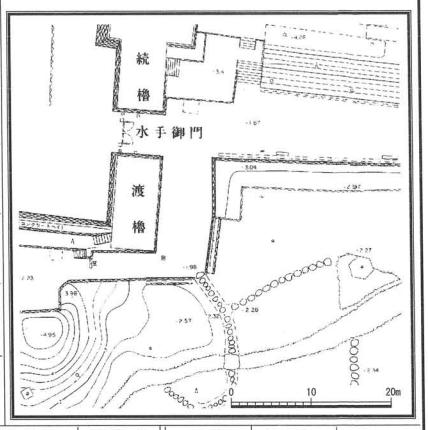
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	割石乱積	積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3009	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石、切石	石垣位置
石垣部位	その他（三ノ丸区画、庭）				石積工法	布積	
方　位	西				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	

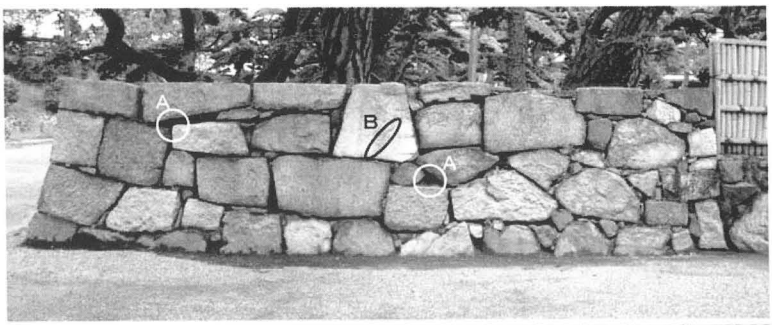


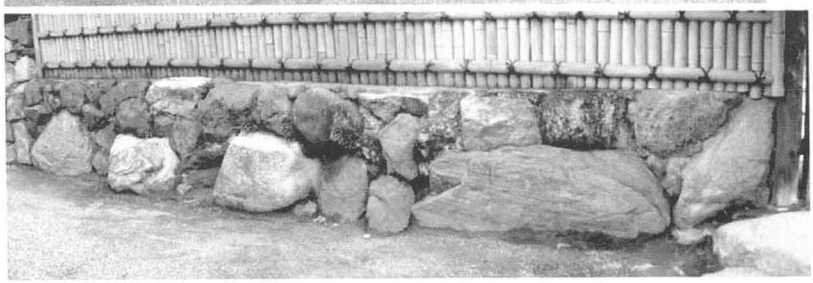
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好					n1			n1			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	7.08/6.94	14.29	1.82/1.03	1.74/0.94	1.78/0.98	82	83	80	86	－

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修	基底部
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状





A．間詰石少々ヌケ
B．ヒビ
※左は石材が揃った大きい切石を用いて横目地を通して積む（布積）
　右は庭園の石材風

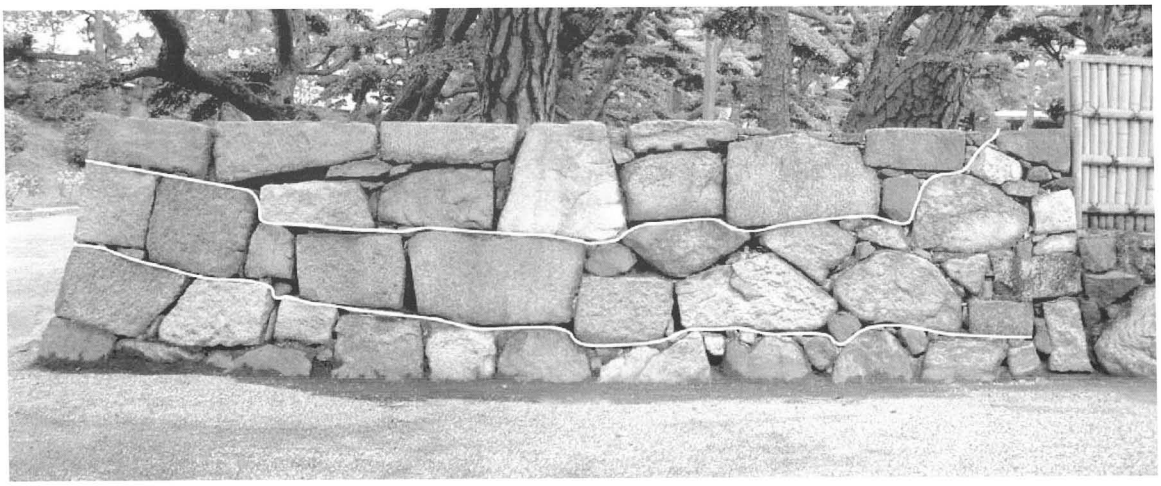
備　考	右角勾配は乱れ、残存石垣一石のみで計測不可	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園北側の西面石垣で、通路と庭園を画している。庭園部の築山の土留石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約1.7m、全長は天端で約14mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は左半が花崗岩の割石と切石を用いた布積、右半が花崗岩の野面石を用いた乱積である。左側は形状が揃った石材を使用し、横目地を通した積み方であるが、右側は石材形状、大きさが不揃いである。 ・石材は方形で角張ったもの、丸みのあるものが混在し、規模は標準的なものが多い。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケや築石のヒビはあるものの、変形もなく安定している。
石垣の変遷	・左半は松平期の庭園が造られた時代のものと考えられ、新郭造築期ないしはその後のものの可能性が高い。 ・右半は『旧高松御城全図』によると右半部分は披雲閣の内部に位置することから、明治以降のものと考えられる。

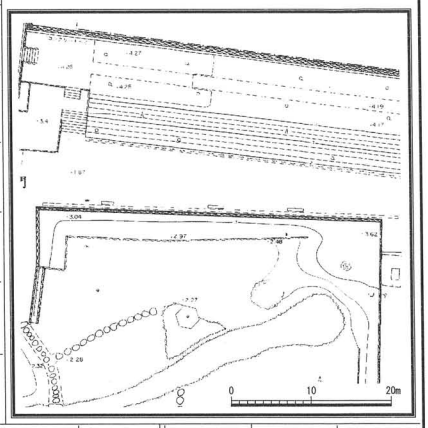
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
全体的に見られる横目地	全面	花崗岩	方形角・丸	大小混じる	切石・割石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3010	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	その他（三ノ丸区画）				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木）左	割石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩、凝灰岩（一部）	
転用石	無				刻　印	無	

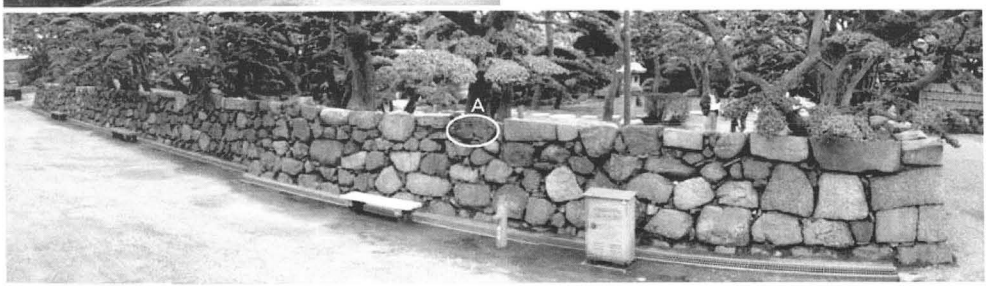


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s1				s2			a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		42.6	43.18	1.8	1.73	1.82	72	75	80	84	82

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．ワレ
※間詰石所々ヌケ

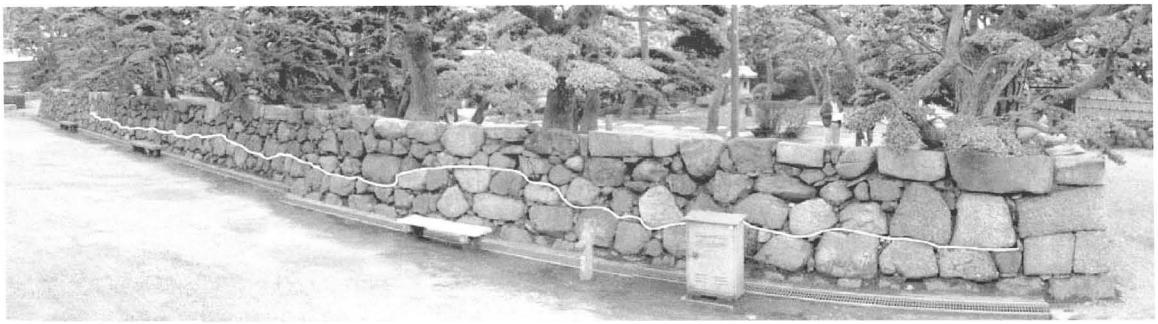
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸と三ノ丸を画する北面石垣である。見学動線に沿う石垣である。 ・高さは中央部で約1.7m、全長は天端で約42.6mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積である。ほぼ同規模の石材を使用し、丁寧に積まれている。 ・石材は方形で角張ったもの、丸みのあるものが混在し、規模は標準的なものが多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積で、右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石材にワレや、間詰石のヌケが見られるものの、安定している。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によると三ノ丸北東隅の石垣は現在より南側で、屏風折に描かれており新郭築造期に三ノ丸北東を拡張させ、連続する石垣として築造された石垣と考えられる。 ・上部の積み直しの可能性もある。

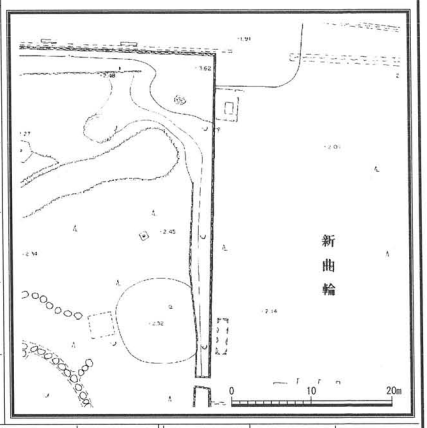
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣下部から中段にかけての横目地	上方	花崗岩	方形	ほぼ同規模	野面石布積	上方の積み直しか築造時のもの
	下方	花崗岩	方形		野面石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3011	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	その他（三ノ丸区画）				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

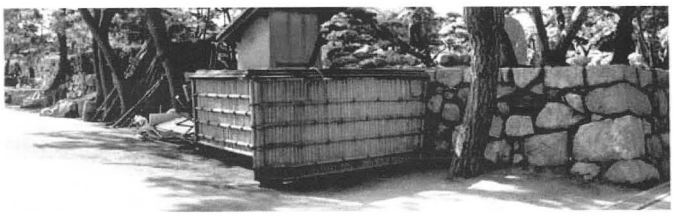


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	n1										a3	b2	D

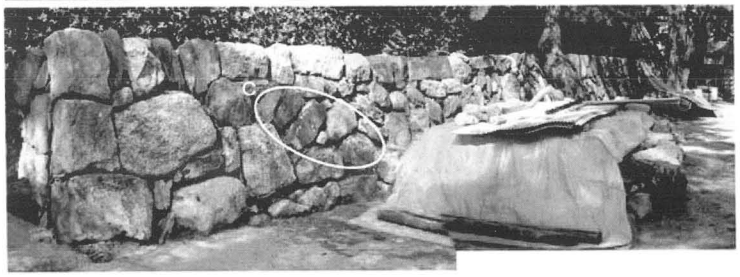
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	39.57	40	1.46	1.75	1.81	72	75	76	79	72

築造時期	新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．マツで押される
B．天端石トレ
C．石材斜め使い



備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

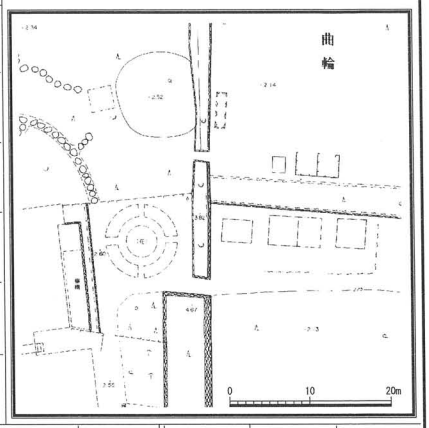
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸と三ノ丸を画する東面石垣である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約39.6mである。 ・本来は№3011～3015石垣まで続く一連の石垣である。 ・勾配は76度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材の形状、大きさともに不揃いで、積み方も石材を斜めに使うなど、やや乱雑な積み方が見られる。 ・左隅角は算木積になっていないが、右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・欠損が見られる程度で、石垣は安定している。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』では描かれていない石垣であり、新郭造築期に三ノ丸北東隅を拡張させて築造した石垣と考えられる。 ・左隅角は後世の開口のための取り外しに伴って、積み直されたものであり、本石垣は後世の改変が多く見られる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部の縦目地	左側	花崗岩	やや扁平	下方に比べて小ぶり	切石布積	隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3012	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石、野面	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法		乱積、谷積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

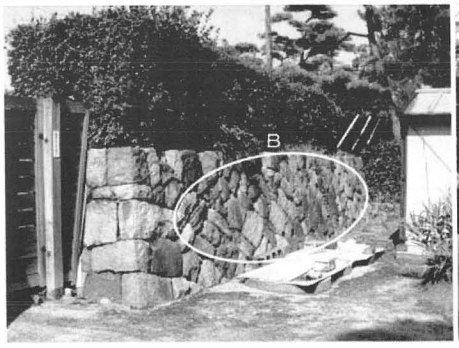
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	n1										a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	13.97	14.43	1.58	1.61	1.36	79	80	75	74	75

築造時期	生駒期・新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．天端石トレ
B．谷積



備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

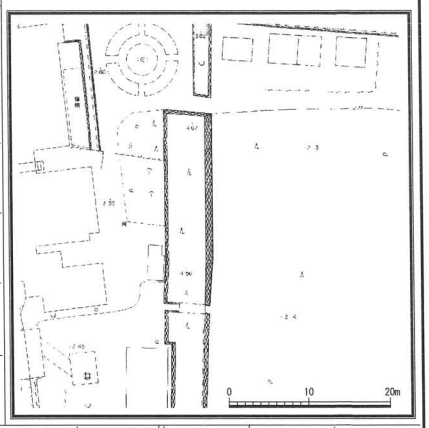
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北側の庭園東側の石垣で、北半では北ノ丸と三ノ丸を画する東面石垣であり、南半は中堀に面する石垣である。 ・高さは中央部で約1.6mであるが、南半の下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約14mである。 ・本来は№3011～3015石垣まで続く一連の石垣である。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積であるが、野面石も混在する。また、部分的に谷積も見られる。左隅角は切石、右隅角は割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角張ったもの、丸みのあるものが混在し、規模は標準的なものが多いがやや小ぶりのものも混在する。 ・右隅角一帯では石材の形状、大きさともに不揃いで、やや乱雑な積み方が見られる。 ・左隅角は完成度の低い算木積であるが、右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によると、南半の堀に面する部分は生駒期に築造されたと考えられ、北半の北ノ丸と三ノ丸を画する部分は新郭造築期に三ノ丸北東部を拡張させて築造されたと考えられる。 ・両隅角は後世の開口に伴うものであるが、石垣全体が後世の積み直しとも考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部の縦目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	割石乱積	隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3013	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		野面、割石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	塀、不明建物				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

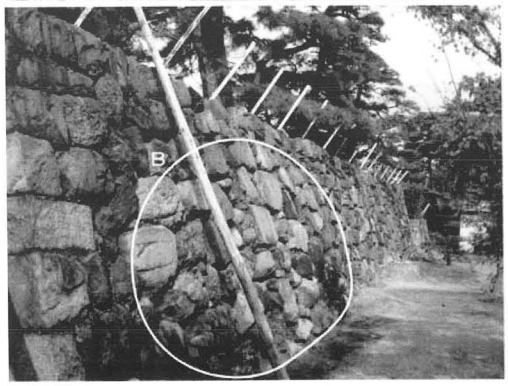


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s3t2								a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	23.26	23.66	2.63	2.73	2.78	78	77	75	73	72

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



A．開口部の積み直しライン
B．ハラミ
C．少々ハラミ

※本来№3014と一体の石垣

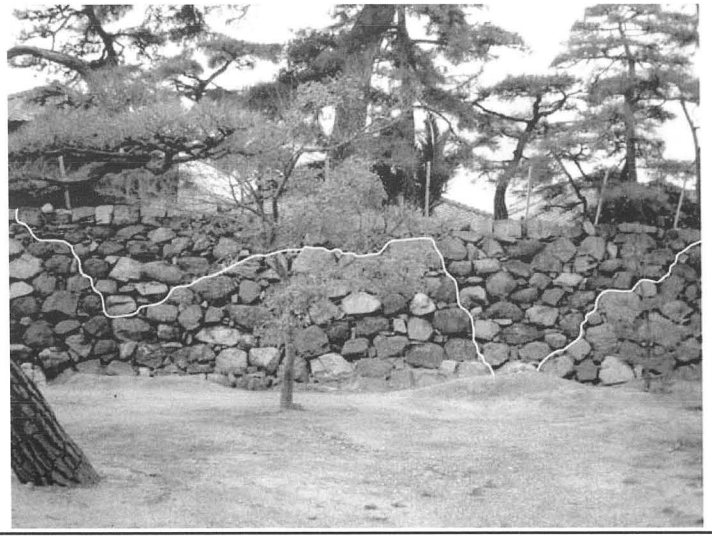
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東面石垣で、埋め立てられた中堀に面する。 ・高さは中央部で約2.7mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約23.3mである。 ・本来は№3011～3015石垣まで続く一連の石垣である。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積であるが、両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中段から下段にかけてハラミが面的に広がっており、やや安定性に欠ける。
石垣の変遷	・両隅角とも開口に伴い積み直されている。また、築石部南半には積み直しと考えられる目地が見られ、改変を受けている。

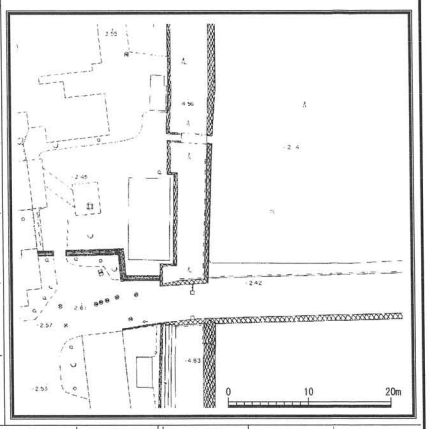
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
中央部天端から下部に達するW字状の目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	W字状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3014	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		野面、割石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s3t2								a2	b2	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		16.61	17.07	2.52	2.65	2.72	72	75	70	78	78

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

A．転用石（凝灰岩）
B．ハラミ
C．開口部積み直しライン

※本来No.3013と一体の石垣

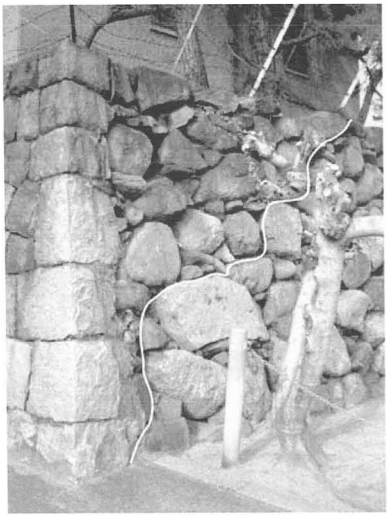
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

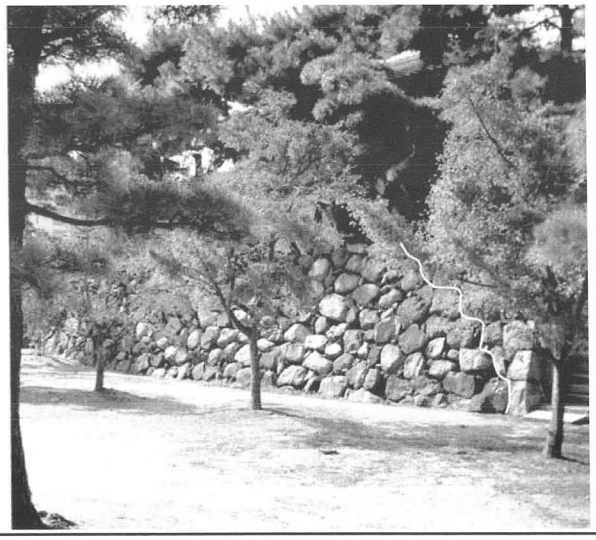
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東側の東面石垣で、埋め立てられた中堀に面する。 ・高さは中央部で約2.7mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約6.6mである。 ・本来は№3011～3015石垣まで続く一連の石垣である。 ・勾配は70度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中央部に薄いハラミが見られるものの、安定している。
石垣の変遷	・両隅角とも開口に伴う積み直しが行われている。

目地の状況

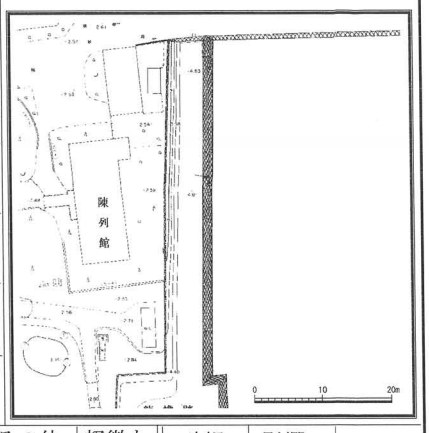
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	
左隅角下部から天端に至る右上がりの目地	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	





史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3015	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、切石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法	乱積、谷積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

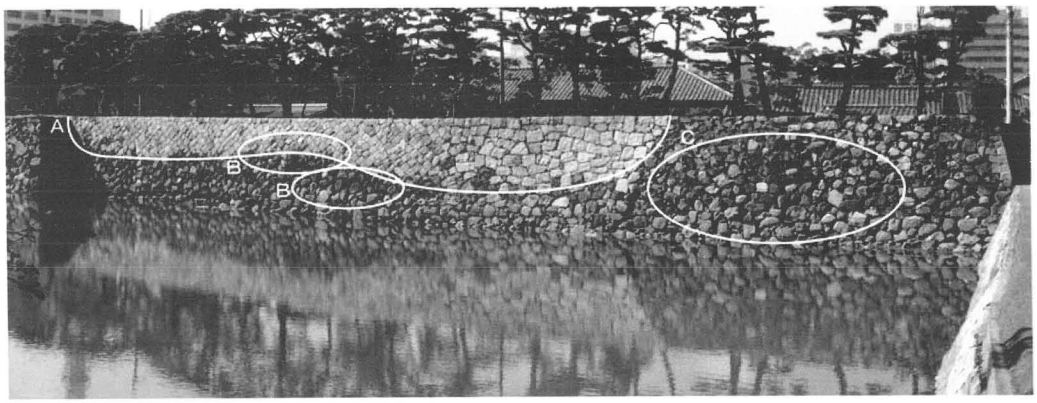


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s23								a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	51.05	49	4.5	4.61	4.48	76	70/83	70	76	70

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



A．積み直しライン
　白い石材の下も谷積、２回以上やりかえか
B．うすいハラミ
C．ハラミ

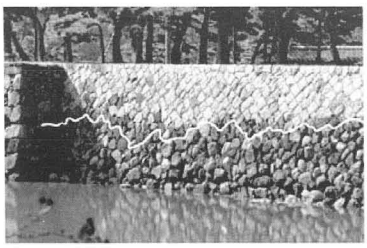
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

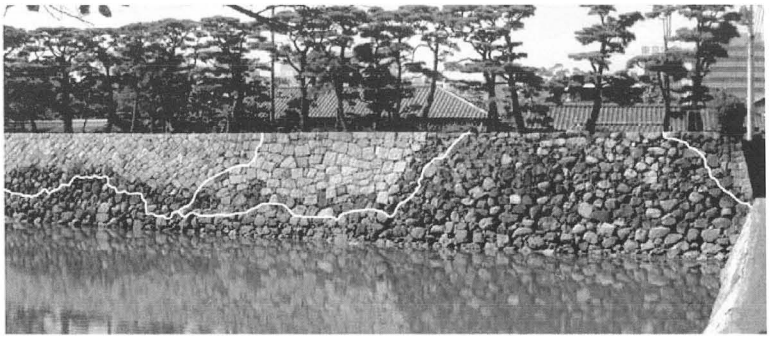
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東南部の東面石垣で、中堀に面する。 ・高さは中央部で約4.6m、全長は天端で約51.1mである。 ・本来は№3011～3015石垣まで続く一連の石垣である。 ・勾配は70度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積であるが、一部切石を用いた谷積が見られる。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石垣中央やや右寄りから左隅角にかけて上段部が方形切石によって積み直されている。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中段から下段にかけて薄いハラミが見られる。
石垣の変遷	・左側上半分は切石によって全面積み直されている。

目地の状況

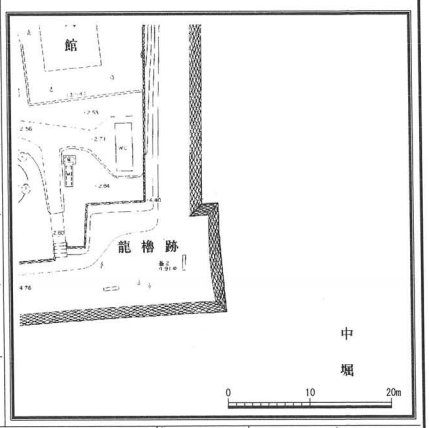
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	隅角部の石材は小ぶり	野面石乱積	隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	
右隅角近傍の天端から下部に至る左下がりの目地	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	左側石垣の積み直し
	右側	花崗岩	方形野面石		野面石乱積	
右中間の天端から下部に至る左下がりの目地	左側	花崗岩	方形切石	左側がやや小ぶり	切石谷積	左側石垣の積み直し
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	
左隅角部中段から右隅角近傍に至る横目地	上方	花崗岩	方形切石	上方石材がやや小ぶり	切石布積	上方石垣の積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	





史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3016	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左	割石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	龍櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	有(穴の開いた石材)				刻　印	無	



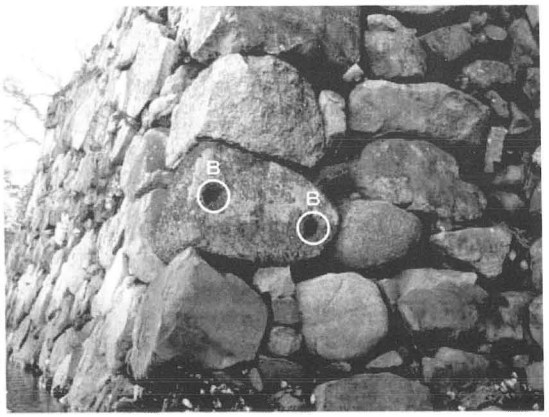
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								n24			a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		2.39	2	4.89	4.76	4.73	79	87	-	81	76

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．間詰石のヌケ
B．穴のあいた石材（転用石？）



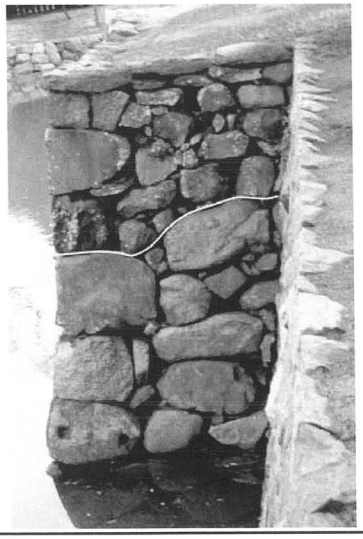
備　考	短い石垣のため中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東南部龍櫓台の北面石垣で、中堀に面する。 ・高さは中央部で約4.8m、全長は天端で約2.4mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるもので、規模は標準的なものが多いが、石垣中段より上方で割石の小石材が見られる。 ・左隅角の上部は完成度の低い算木積である。下部は算木積を意識しているが、算木積になっていない。 ・左隅角7石目の石材は2ヶ所に穴が開いており、転用石の可能性がある。 ・刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・上下で石材の規模が異なることから、上部の積み直しが考えられる。

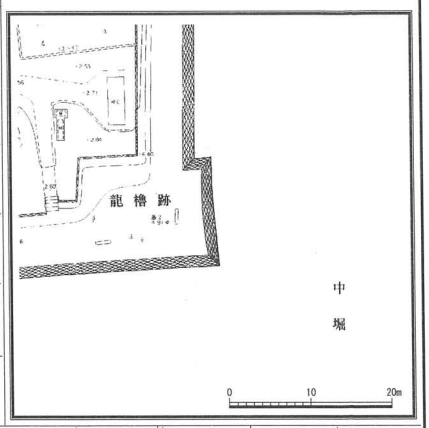
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣中段の横目地	上方	花崗岩	方形割石	上方石材はかなり小ぶり	割石乱積	上方石垣の積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3017	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	龍櫓				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	有(穴の開いた石材)			刻　印			長方形、ち、り	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
									s2			a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		10.75	13.5	5.02	5.17	5.28	76	77	75	80	79

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

A．刻印コ４口
B．間詰石のヌケ

※石材の大小の差がある

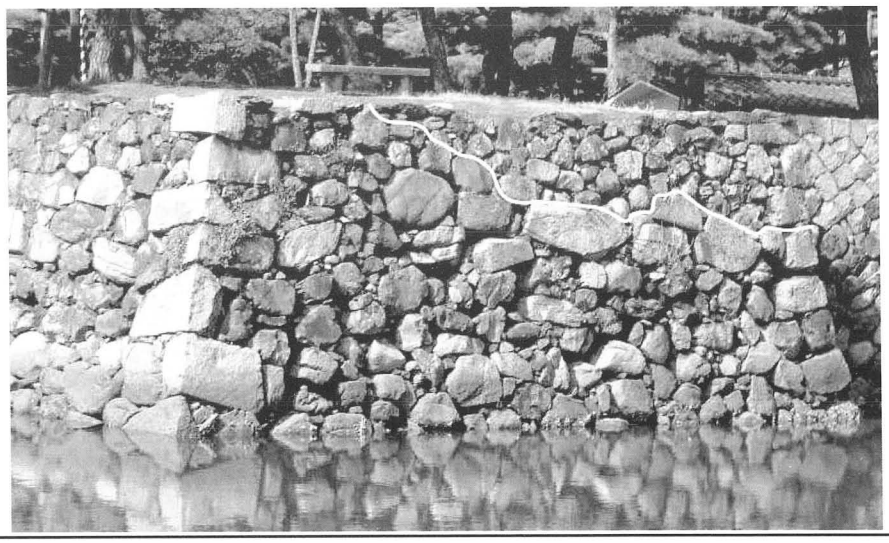
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東南部の龍櫓台東面の石垣で、中堀に面する。 ・高さは中央部で約5.2m、全長は天端で約10.8mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものが多く、規模はやや小ぶりのものが多いが、所々にやや大ぶりのものも見られる。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・右隅角7石目の石材は2ヶ所に穴が開いており、転用石の可能性がある。 ・刻印は左隅角3石目に、長方形・ち・りが見られる。
破損状況	・間詰石のヌケが多く見られるが安定している。
石垣の変遷	・上部の積み直しが考えられる。

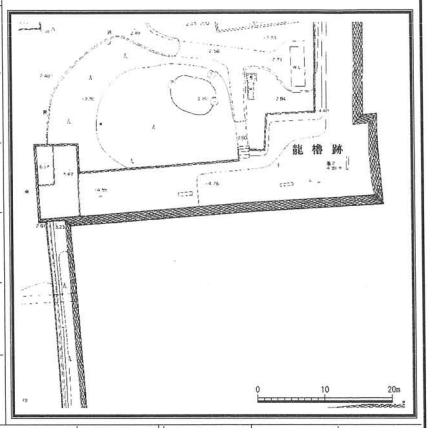
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部近傍天端から右隅角部中段に至る目地	上方	花崗岩	方形割石	上方石材はかなり小ぶり	割石乱積	上方石垣の積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3018	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	龍櫓、多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2		s1							a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.9/43.61	4.0/47.0	5.76	5.04	5.14	79	84	89/75	80/80	76

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

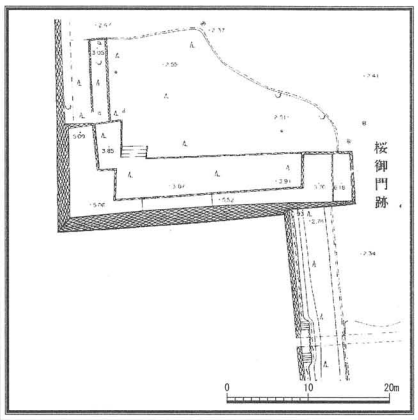
A．ハラミ
B．前へ落ちる
C．間詰石ヌケ
D．うすいハラミ
E．ワレ落ち

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の南部の南面石垣で、中堀に面する。 ・高さは中央で約5.0m、全長は天端で約49.5mである。 ・勾配は75～89度と変化が見られるが、概ね平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積である。左隅角は切石、右隅角は割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多いが、大小混在する。 ・左隅角は完成度の高い算木積であるが、右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のワレや薄いハラミなどの変形が見られるが、安定している。
石垣の変遷	・部分的な積み直しが考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

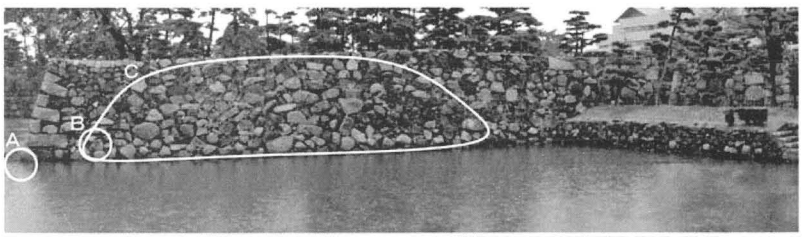
石垣番号	3019	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓、桜御門				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

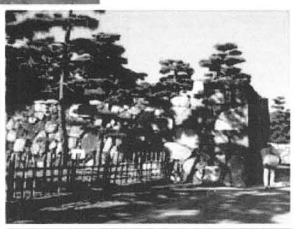
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2	s2								a2	b2	B

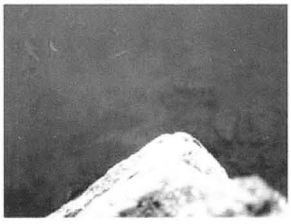
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		32.51/2.82	28.0/8.38	5.35/3.99	5.85/3.62	5.80/3.54	67	72	73	85	83

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	明治15年撮影天守写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状







A．根石は前に持ち出して積む
B．石材が30cmほど前に飛び出す
C．ハラミ
D．石材が前にズレ出し

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日 平成16年12月17日

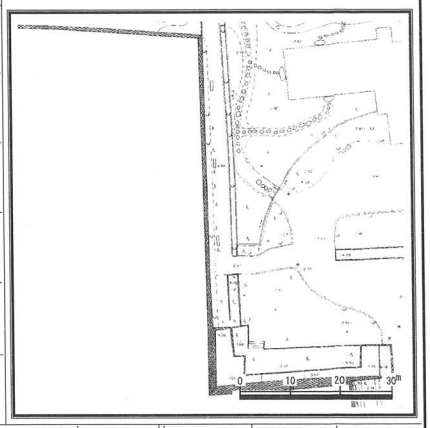
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の南部の南面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約5.9m、全長は天端で約35.3mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積であるが、左隅角は割石、右隅角は切石を用いて積み上げられている。 ・石材は角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多いが、大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積であるが、左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中央部を中心に薄いハラミが見られるが、ほぼ安定している。 ・左側中央部では石材が前にズレ出している。
石垣の変遷	・明治15年撮影の写真によると、左隅角上部付近が現状と異なることから、明治15年以降の積み直しがあったことが判明している。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角上部から天端に至る谷形の目地	谷形の中側	花崗岩	方形割石	上方の石材はかなり小ぶり	割石乱積	谷形部の積み直し
	谷形の外側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左隅角部近傍の笠石による横目地	上方	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	笠石の積み上げ
	下方	花崗岩	方形割石		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

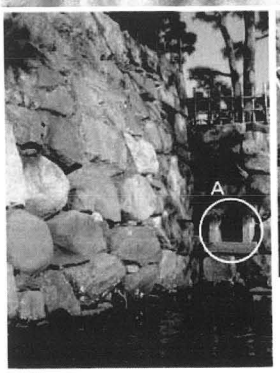
石垣番号	3020	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石、野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)、凝灰岩(一部)	
転用石	無			刻　印			上、○、×	

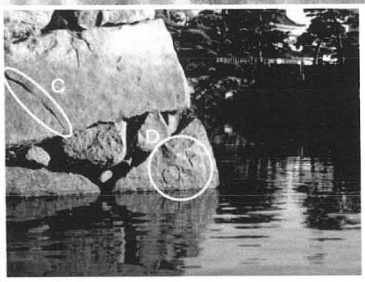
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s4							a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		57.74/11.13	59	2.47/5.43	2.43/5.16	2.4/5.35	78	81	76	73	67

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理（全面解体修理） 『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料	明治15年撮影天守写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．暗渠
B．刻印上
C．ワレ
D．刻印○×

櫓台の算木積のライン（縦目地）が入る

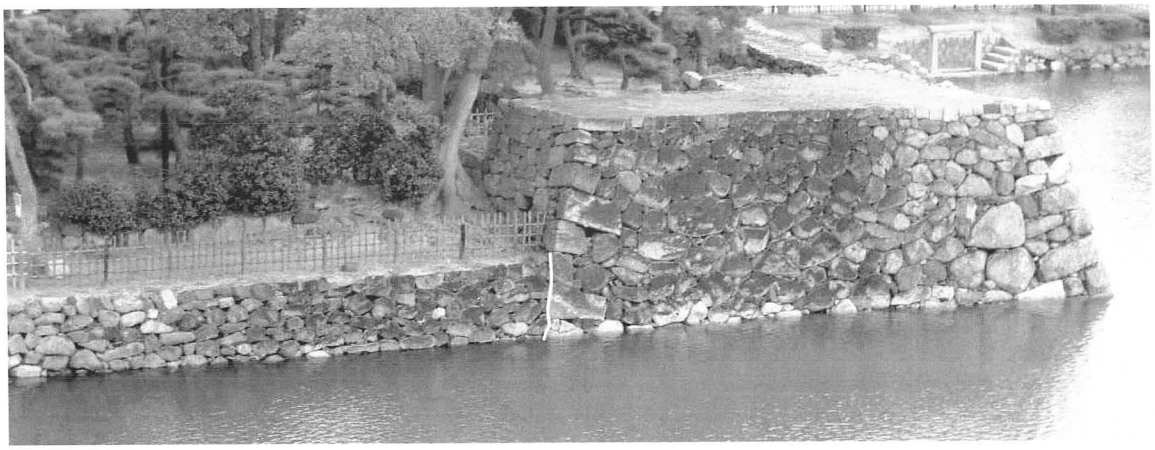
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の南部の西側の西面石垣で、内堀に面する。 ・高さは櫓台で約5.2m、中央部で約2.4mである。全長は天端で約68.8mである。 ・勾配は中央部で76度、櫓台で約73度と緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積であるが、野面石も用いている。右隅角及び櫓台左隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多い。櫓台ではやや大ぶりの石材も見られる。 ・右隅角及び櫓台左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角11石目に○・×、櫓台左隅角4石目に上が見られる。
破損状況	・石材のワレが見られるが、安定している。
石垣の変遷	・明治15年撮影の写真によると、№3019石垣の左隅角上部付近が現状と異なることから、本石垣の右隅角上部付近も明治15年以降に積み直された可能性が高い。 ・櫓台部分を除き、昭和48年度に修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭打設により補強している。

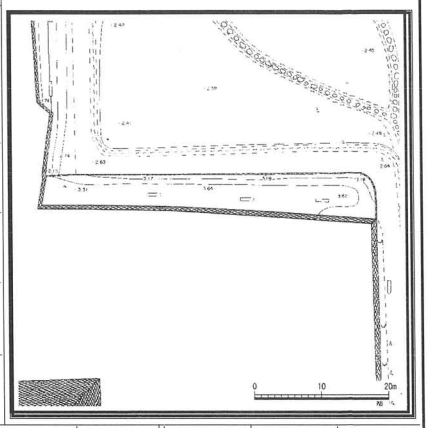
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
櫓台左隅角部の縦目地	左側	花崗岩	方形割石	左側石材はか	割石布積	左側石垣積み直し
	右側	花崗岩	方形割石	なり小ぶり	割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3021	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石、野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

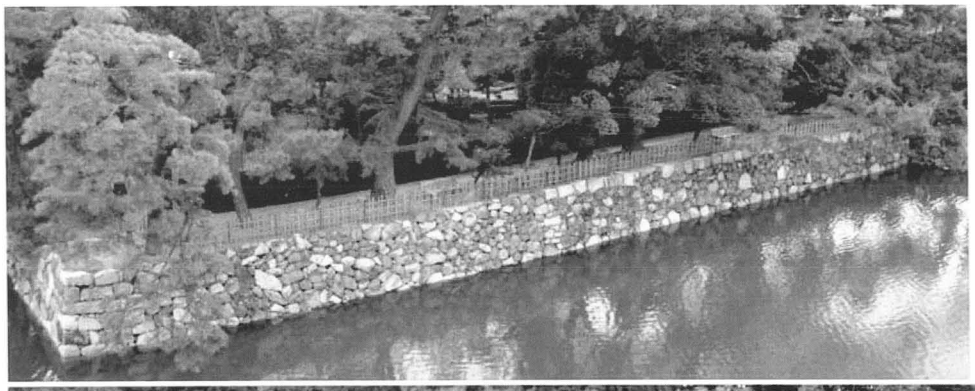


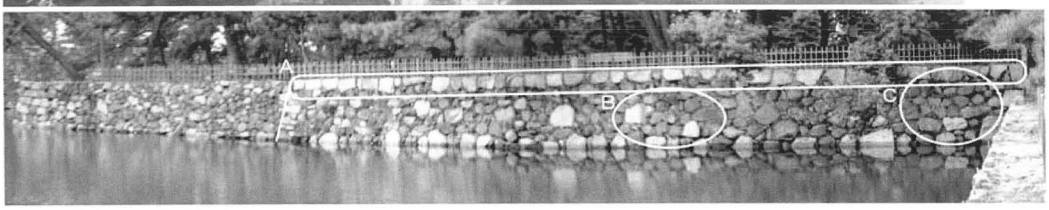
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2								a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	49.8	49.47	3.98	3.86	3.54	84	84	80	84	84

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理（左から17m区間解体修理）『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．天端石は切石で揃える
B．わずかなハラミ
C．ハラミ
※昭和48年修理（左端から17m）

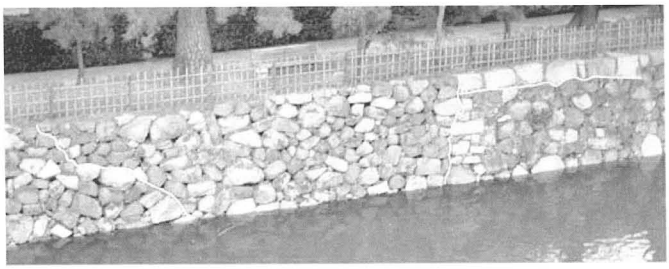
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

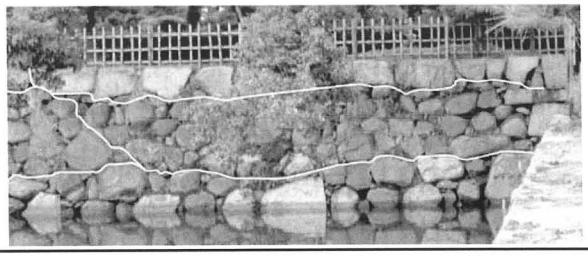
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の南西部の南面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約3.9m、全長は天端で約49.8mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石と野面石を用いた乱積である。 左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多いが、一部大ぶりの石材も見られる。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中段部に薄いハラミが見られる。
石垣の変遷	・中央部に目地が見られ、積み直しの可能性がある。 ・昭和48年度に左隅角から17mの区間が修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷・松丸太杭打設により補強している。 ・修理箇所以外の部分についても、天端に切石を使用して、高さを揃えている。

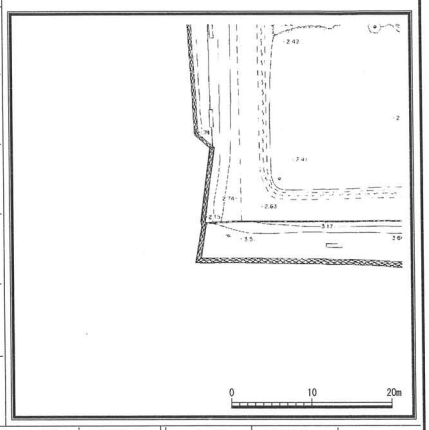
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部近傍下部の横目地	上方	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	割石布積	布積
	下方	花崗岩	方形割石		割石乱積	
右隅角部から中央部に至る笠石下の目地	上方	花崗岩	方形割石	笠石は大ぶり	割石布積	石材形状、規模の違い
	下方	花崗岩	方形割石		割石布積	
右中間天端から下部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形割石	左側はやや小ぶり	割石乱積	左側石積の積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	方形割石		割石乱積	
石垣中央部天端から右下がりに下部に至る目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	右側石積の積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	方形割石		割石乱積	





史跡高松城跡　石垣調査

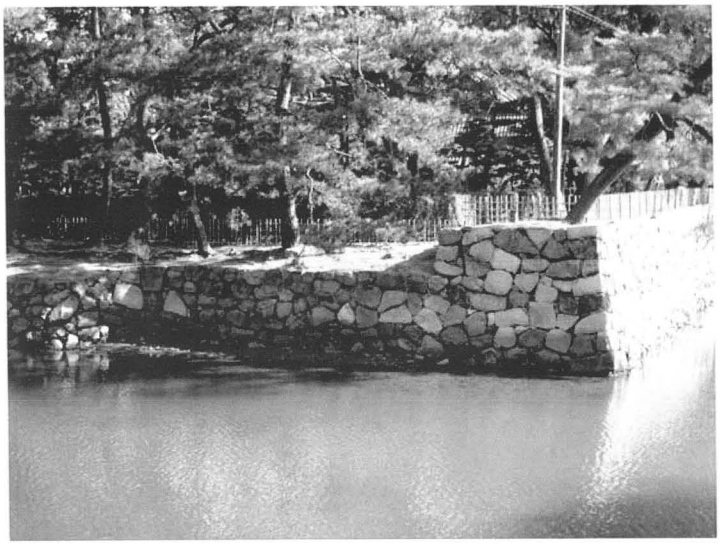
石垣番号	3022	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石、野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	9.1/4.65	14.12	1.94/3.55	2.2/3.74	2.22/3.91	78/75	77/77	76/77	83/83	84/84

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理（全面解体） 『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



右側は方形に近い割石を多く用いる

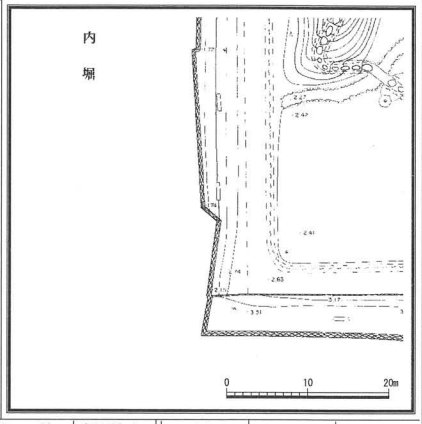
※昭和48年修理

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の南西部の西面石垣で、内堀に面する。 ・高さは右隅角で約3.9m、中央部で約2.2mである。全長は天端で約13.8mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は鈍角の入隅である。 ・石材は方形の角張ったものが多く、規模は標準的なものが多いが、右隅角一帯はやや大ぶりの石材が多い。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によると№3022～3026石垣は連続する石垣として描かれており、『旧高松御城全図』では、№3022・№3023石垣が見られることから松平初期の改修の可能性が高い。 ・昭和48年度に全面修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭内設により補強している。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3023	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.64	2.73	1.8	1.88	1.95	79	72	75	78	75

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理（全面解体） 『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

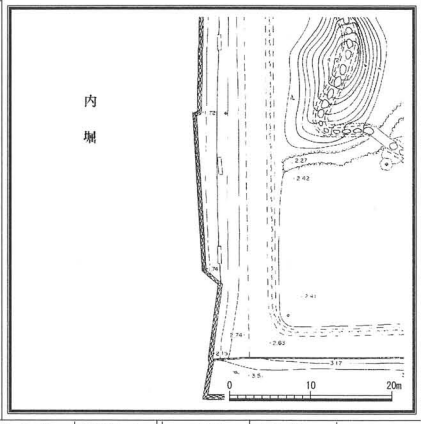
※昭和48年修理

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は長大な三ノ丸西面の堀石垣を区切る3～4石の幅を持つ南面石垣である。 ・高さは右端で約2m、左端で約1.8mで、天端は斜めになっている。全長は天端で約2.6mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。左隅角は出隅、右隅角は入隅でいずれも鈍角である。 ・石材は方形の角張ったもので、規模は標準的なもので揃っている。 ・左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によると№3022～3026石垣は連続する石垣として描かれており、『旧高松御城全図』では№3022・3023石垣が見られることから、松平初期の改修の可能性が高い。 ・昭和48年度に全面修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭打設により補強している。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

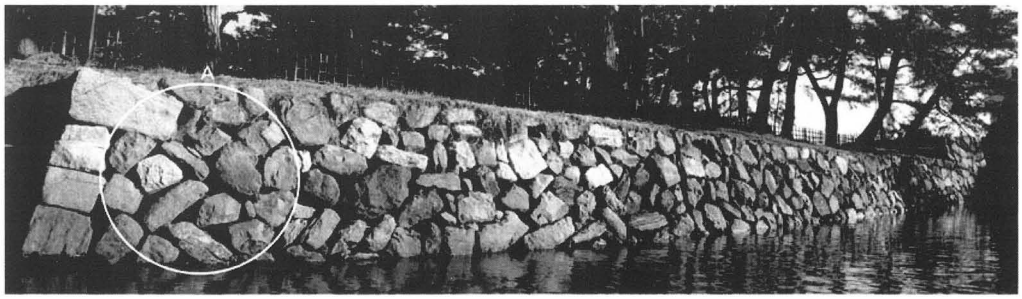
石垣番号	3024	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s2							a3	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		19.11	19.84	2.01	2.09	1.97	73	73	74	75	79

築造時期	生駒期・明治以降	改修	有	基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理（全面解体） 『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．谷積

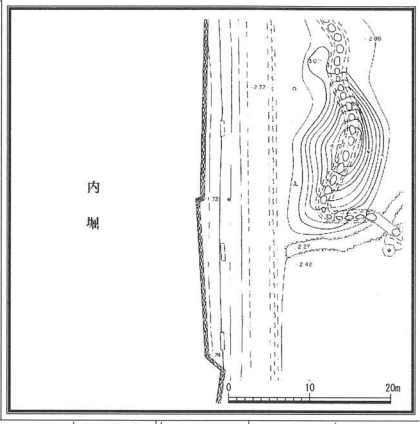
※昭和48年修理

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の西部の西面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約2.1m、全長は天端で約19.1mである。 ・勾配は74度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積であるが、部分的に谷積も見られる。両隅角とも割石を用いて積み上げられており、右隅角は鈍角である。 ・石材は方形の角張ったものが多く、規模は標準的なもので揃っている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・一部ワレのある石材も見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると№3024～3026石垣は連続する石垣として描かれており、明治以降の積み直しの際に築造された可能性が考えられる。 ・昭和48年度に全面修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭打設により補強している。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

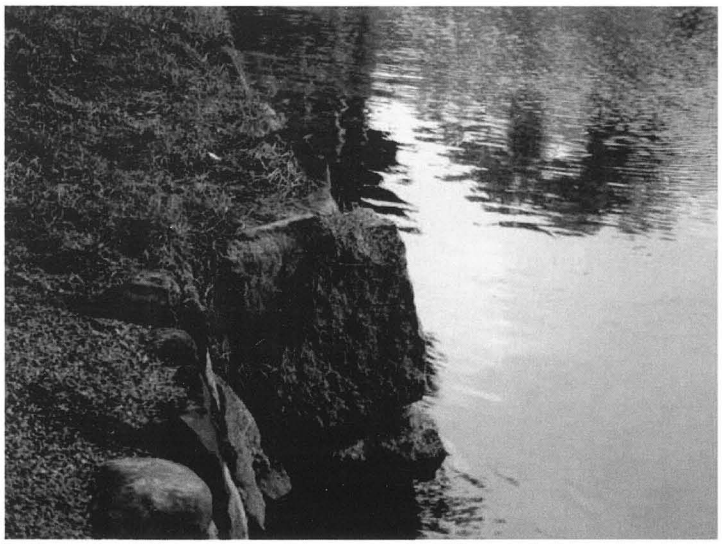
石垣番号	3025	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	0.51	0.51	-	1.81	-	73	-	-	-	73

築造時期	生駒期・明治以降	改修	有	基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理（全面解体） 『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



一石のみ

※昭和48年修理

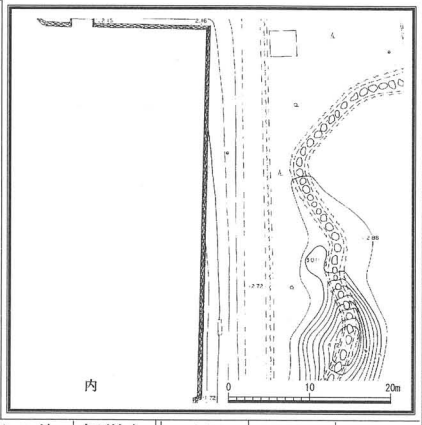
備　考	短い石垣のため中央高のみ計測、左端勾配・右端勾配・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は長大な三ノ丸西面の堀石垣を区切る1～2石の幅を持つ北面石垣である。 ・高さは約1.8m、全長は約51cmである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。 ・石材は方形の角張ったもので、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると№3024～3026石垣は連続する石垣として描かれており、明治以降の積み直しの際に築造された可能性が考えられる。 ・昭和48年度に全面修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭打設により補強している。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3026	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	45.96	45.28	1.83	1.82	1.83	80	80	74	69	73

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理（全面解体） 『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※昭和48年修理

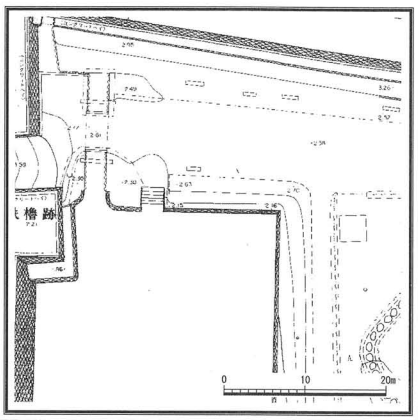
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の北西部の西面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約46mである。 ・勾配は74度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・昭和48年度に全面修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭打設により補強している。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3027	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		野面、割石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

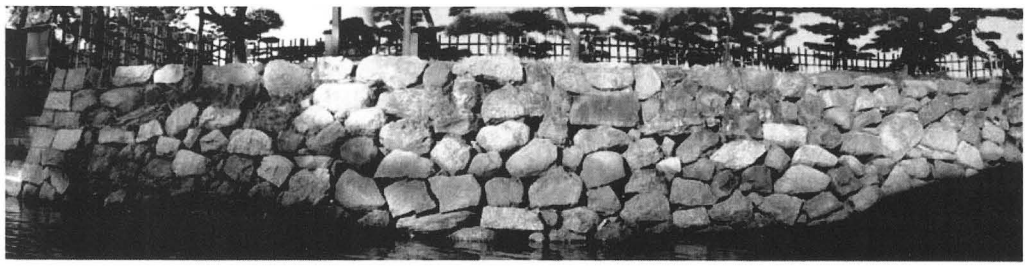


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	14.26	14	2.6	2.33	1.84	74	73	75	80	80

築造時期	明治以降	改修	有	基底部	胴木(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度修理(全面解体) 『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



※昭和48年修理（当初の石垣はこれより北側地点にあった）

備　考	北側1m地点に旧石垣根石有り	調査年月日	平成16年12月 9日

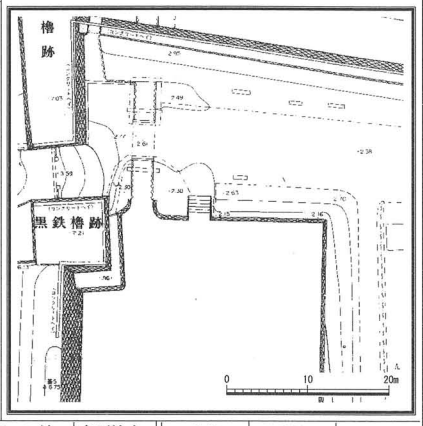
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の北西部の南面石垣で、内堀に面する。左隅角で内堀へ下る石段に接する。 ・高さは中央部で約2.3m、全長は天端で約14.3mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・当初の石垣は、北約1mにあり、根石のみ埋没している。(No.3103石垣) ・明治以降水門設置時に切石の谷積で石垣改変。その後昭和48年度に現在の石垣に修理されており、当初の石垣の形状、工法等は不明。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭打設により補強している。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3028	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法		布積	
方　位	西				角石（算木）	左		
角の形状	左隅角	入				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無				刻　印		無	

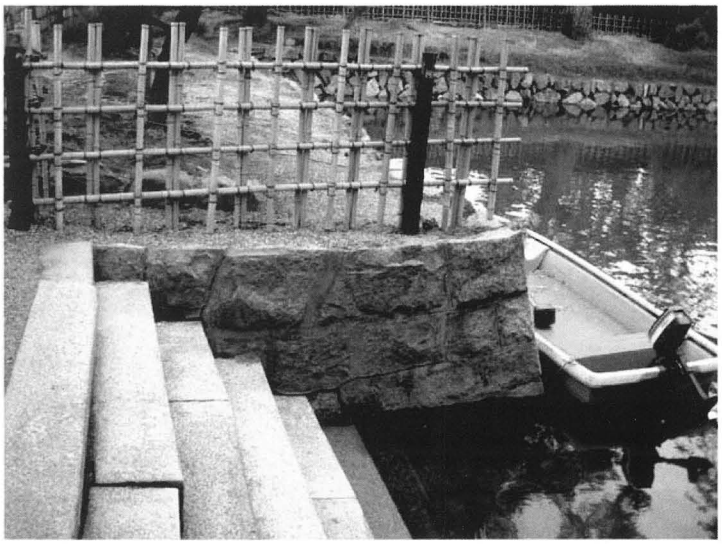


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.52	0.93	0.2	-	1.7	80	90	90	87	74

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

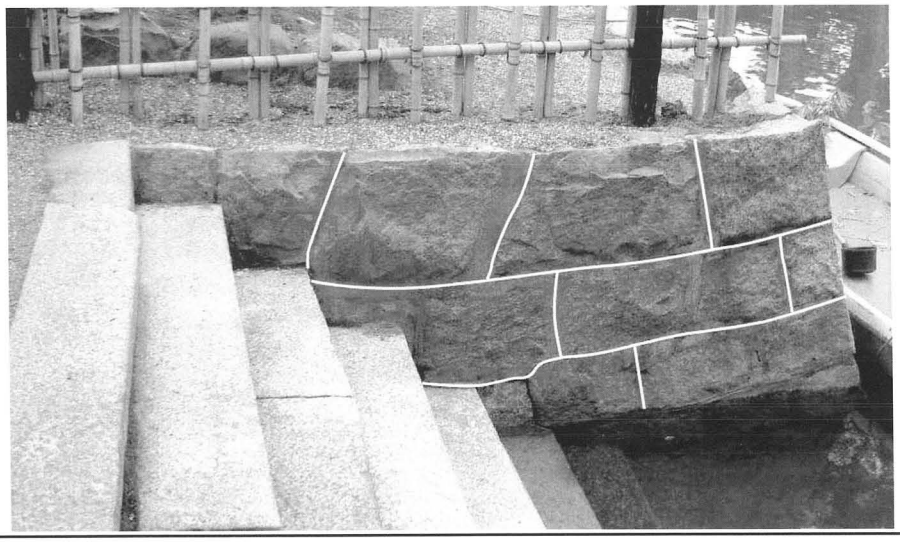


切石布積、目地モルタル詰め

備　考	すり付け	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の北部で内堀に下る石段の側壁で西面石垣である。 ・高さは右隅角で約1.7m、全長は天端で約2.5mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は石段にすり付けである。 ・石材は方形で、規模は標準的なもので揃っている。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。 ・目地には全面モルタルを詰められている。
石垣の変遷	・明治以降水門設置時に築造されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
全体的に見られる横目地	全面	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積・モルタル目地	布積